

日田市高瀬遺跡群の調査 1

せい わ じん じゃうら
誠和神社裏遺跡

ご とう け
後藤家墓地

じん が はる つじ ばる
陣ヶ原辻原遺跡

たか せ ふか た
高瀬深ノ田遺跡

1995

大分県教育委員会

日田市高瀬遺跡群の調査 1

誠和神社裏遺跡

後藤家墓地

陣ヶ原辻原遺跡

高瀬深ノ田遺跡



(1975年撮影)

序

九州のほぼ中央に位置する日田市には、旧石器時代から中世・近世にかけての数多くの遺跡が存在しており、近世には九州天領の中心地として栄え、多くの文化遺産が知られているところであります。とりわけ三隈川南岸地区は、奈良時代の「豊後国風土記」に記載された石井駅・鏡坂の伝承地にあたり、周辺には国指定史跡ガランドヤ古墳や穴観音古墳が所在しております。

この地区に、日田市内の交通体系の整備の一環として一般国道210号日田バイパスの建設が計画され、多くの遺跡が発見されました。発見された8遺跡の記録保存のための発掘調査を平成元年度から5年度にかけて実施し、その結果、奈良時代を中心とする縄文時代から江戸時代におよぶ遺跡が確認されました。

このたび、そのうちの高瀬地区所在の4遺跡の発掘調査報告書を刊行するはこびになりました。その結果は、今後の文化財保護や学術研究に貢献するところが少なくないものと確信いたします。

最後になりましたが、この調査に、深いご理解と御協力をいただいた建設省大分工事事務所、日田維持出張所をはじめ、日田市立博物館、地元各自治会などの関係各位に対し、心から感謝を申し上げます。

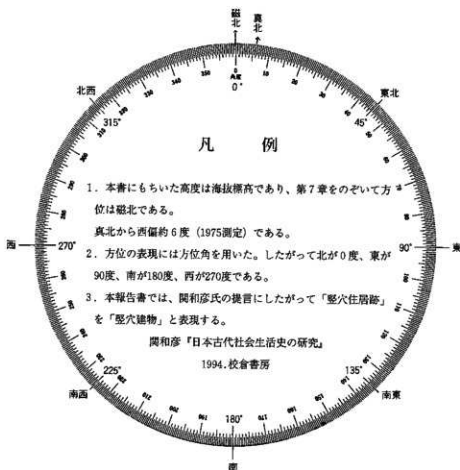
平成7年3月31日

大分県教育委員会教育長

帯 刀 将 人

例 言

1. 本書は、一般国道210号日田バイパスの建設に伴い建設省大分工事事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した日田市高瀬地区遺跡群の発掘調査報告書である。
 2. 本書に報告する遺跡は、平成元年度と2年度に確認調査・本調査をおこなった遺跡のうち、日田市大字高瀬に所在する、高瀬深ノ田遺跡・誠和神社裏遺跡・陣ヶ原辻原遺跡（以上本調査）・後藤家墓地（確認調査）の4遺跡である。
 3. 本書におさめた各遺跡の概要は以下の概報に速報してあるが、本書をもって正式な報告とする。
友岡信彦・吉田寛『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報』1990 大分県教育委員会
- 田中裕介『一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』1991 大分県教育委員会
4. 遺構の実測、写真撮影は各調査担当者がおこなった。遺物の実測は田中・吉田・山田尚志が主としておこない、近世陶磁器については吉武牧子（現佐伯市教育委員会）、石器については高島豊・山田尚志の協力を得た。
 5. 本報告書の作成にあたっては、平成6年度に大分県教育庁文化課文化財資料室において、遺構図面および遺物の整理作業等を実施した。遺構・遺物の浄書は西村しのぶがおこない、写真撮影は田中がおこなった。
 6. 本書の執筆は、田中裕介・友岡信彦・吉田寛が分担してあつた。文責は日次および要項に明記した。
 7. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室において保管している。
 8. 本書の編集・構成は田中が担当した。



目 次

第1章. はじめに	(田中)	1
第1節. 調査にいたる経過		1
第2節. 埋蔵文化財調査の経過と調査組織		1
第3節. 調査日誌抄		7
第2章. 高瀬周辺の地理と歴史	(田中)	9
第1節. 日田盆地の位置と地形		9
第2節. 三隈川南岸の地形		11
第3節. 日田三隈川南岸の歴史		14
第3章. 誠和神社裏遺跡	(田中)	19
第1節. 誠和神社裏遺跡の調査経過と概要		19
第2節. 誠和神社裏遺跡の立地		19
第3節. 誠和神社裏遺跡の現状		20
第4節. 試掘調査の記録		20
第5節. 本調査の方法		24
第6節. 遺構と遺物		24
第7節. 調査の成果と課題		31
写真図版		33
第4章. 後藤家墓地	(田中)	37
第1節. 後藤家墓地の調査経過と概要		37
第2節. 後藤家墓地の立地		37
第3節. 後藤家墓地の現状と構成		38
第4節. 石製墓碑の記録		39
第5節. 調査の成果と課題		43
第5章. 陣ヶ原辻原遺跡	(田中)	49
第1節. 陣ヶ原辻原遺跡の調査経過と概要		49
第2節. 陣ヶ原辻原遺跡の立地		50
第3節. 陣ヶ原辻原遺跡の現状		50
第4節. 試掘調査と基本層序		50
第5節. 調査の方法と問題点		53
第6節. 遺構と遺物		53
第7節. 調査の成果と課題		69
写真図版		79
第6章. 高瀬深ノ田遺跡	(友岡・吉田)	87
第1節. 高瀬深ノ田遺跡の調査概要		87
第2節. 遺構と遺物		89
第3節. まとめ		91
写真図版		93
第7章. 調査の成果と課題	(田中)	95
高瀬地区の開発史		95

挿 図 目 次

第1章 はじめに

- 第1図. 日田バイパスの路線と遺跡 5

第2章 高瀬周辺の地理と歴史

- 第1図. 日田盆地の位置 8
 第2図. 日田盆地の位置と地勢 9
 第3図. 日田盆地の地形分類図 10
 第4図. 三隈川南岸の地形 12
 第5図. 調査遺跡の位置と周辺地形 14
 第6図. 日田盆地の主要遺跡 15

第3章 誠和神社裏遺跡

- 第1図. 工事用道路と調査区的位置 19
 第2図. 誠和神社裏遺跡の試掘調査範囲 20
 第3図. 基本層序模式図 21
 第4図. 試掘調査出土遺物 22
 第5図. 誠和神社裏遺跡遺構配置図 23
 第6図. 縄文時代包含層の出土状況図 24
 第7図. 縄文時代包含層の出土遺物 25
 第8図. 1号掘立柱建物跡 26
 第9図. 1号掘立柱建物跡出土遺物 27
 第10図. 3号土壌実測図 27
 第11図. 3号土壌出土遺物 27
 第12図. 2号掘立柱建物跡 28
 第13図. 2号掘立柱建物跡出土遺物 28
 第14図. 1号土壌平面図・土層図 29
 第15図. 1号土壌出土遺物 29
 第16図. 2号土壌実測図 29
 第17図. 柱穴群配置図 30
 第18図. 柱穴および上層出土遺物 30

第4章 後藤家墓地

- 第1図. 後藤家墓地墓碑配置図 37
 第2図. 後藤家墓地立地模式図 38
 第3図. 1号墓碑実測図 39
 第4図. 3号墓碑実測図 40
 第5図. 4号墓碑実測図 41
 第6図. 2号墓碑実測図 42
 第7図. 後藤家の墓碑形式 43
 第8図. 後藤家墓地の造墓過程 44

第5章 陣ヶ原辻原遺跡

- 第1図. 陣ヶ原辻原遺跡の調査区 49

- 第2図. 陣ヶ原辻原遺跡遺構配置図 51
 第3図. 4号竪穴建物平面図・断面土層図 54
 第4図. 4号竪穴建物内土壌1平面図・断面図 55
 第5図. 4号竪穴建物出土遺物実測図 56
 第6図. 2号溝平面図・断面図・土層図 57
 第7図. 1号竪穴建物平面図・断面土層図 59
 第8図. 1号竪穴建物カマド遺構平面図・断面図 59
 第9図. 1号竪穴建物出土遺物 60
 第10図. 2号竪穴建物平面図・断面図 61
 第11図. 2号竪穴建物出土遺物 62
 第12図. 3号竪穴建物平面図・断面図 62
 第13図. 3号竪穴建物出土遺物 63
 第14図. 5号溝平面図・断面図 64
 第15図. 5号土壌平面図・断面図 65
 第16図. 2号土壌平面図・断面図 66
 第17図. 4号土壌平面図・断面図 66
 第18図. 第3・4層出土遺物 67
 第19図. 出土石器実測図(その1) 67
 第20図. 出土石器実測図(その2) 68
 第21図-1. 陣ヶ原辻原遺跡時代別遺構変遷図 70
 第21図-2. 陣ヶ原辻原遺跡時代別遺構変遷図 71
 第22図. 陣ヶ原台地の古墳時代～奈良時代遺構 73
 第23図. 明治20年頃の土地利用 76

第6章 高瀬深ノ田遺跡

- 第1図. 高瀬深ノ田遺跡遺構配置図 87
 第2図. 高瀬深ノ田遺跡調査区位置図 88
 第3図. SH1-SH3とその切り合い関係 89
 第4図. SX1出土遺物 90
 第5図. その他の遺物 91

第7章 調査の成果と課題

- 第1図. 高瀬地区の地形概念図 96
 第2図. 高瀬地区の地形断面模式図 97
 第3図. 高瀬地区の遺跡分布 99
 第4図. 高瀬地区の条里と道路遺構および「中世」地名 100
 第5図. 高瀬地区の水田灌溉状況 106
 第6図. 弥生時代の集落と耕地 111
 第7図. 古墳時代～7世紀の集落と耕地 113
 第8図. 奈良時代～平安時代前半期の集落と耕地 114
 第9図. 平安時代後半～中世の耕地 116
 第10図. 近世・近代の耕地 117

表 目 次

第1章. はじめに	第6表. 1号土壌出土遺物観察表 …………… 29
第1表. 日田バイパス埋蔵文化財調査の経過 …… 3	第7表. 柱穴および上層出土遺物観察表 …………… 30
第3章. 誠和神社裏遺跡	第4章. 後藤家墓地
第1表. 試掘調査区出土遺物観察表 …………… 22	第1表. 後藤家墓地造墓年代表 …………… 44
第2表. 縄文時代調査区出土遺物観察表 …………… 25	第2表. 後藤家墓地石製墓碑一覧表 …………… 47
第3表. 1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …………… 28	第7章. 調査の成果と課題
第4表. 3号土壌出土遺物観察表 …………… 28	第1表. 高瀬地区の開発史年表 …………… 119
第5表. 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 …………… 28	

挿 入 写 真 目 次

第4章. 後藤家墓地	写真3. 3号墓碑 …………… 40
写真1. 後藤家墓地遠景 …………… 37	写真4. 4号墓碑 …………… 41
写真2. 1号墓碑 …………… 39	写真5. 2号墓碑 …………… 42

写 真 図 版 目 次

第3章. 誠和神社裏遺跡	写真9. 2号溝全景 …………… 82
写真1. 誠和神社裏遺跡全景 …………… 33	写真10. 2号溝 …………… 82
写真2. 1号掘立柱建物跡 …………… 33	写真11. 2号溝断面図 …………… 82
写真3. 掘立柱建物1号、2号 …………… 33	写真12. 1号竪穴建物全景 …………… 83
写真4. 縄文時代早期調査区 …………… 34	写真13. 1号竪穴建物 カマド …………… 83
写真5. 縄文時代早期調査区と出土遺物 …………… 34	写真14. 1号竪穴建物 出土遺物 …………… 84
写真6. 試掘調査区 出土石器 …………… 35	写真15. 2号竪穴建物 …………… 84
写真7. 試掘調査区 出土土器 …………… 35	写真16. 2号竪穴建物 出土遺物 …………… 84
写真8. 遺構出土遺物 …………… 35	写真17. 3号竪穴建物 …………… 85
写真9. 小原地区の試掘 …………… 36	写真18. 3号竪穴建物 出土土器 …………… 85
写真10. 1990年度の調査風景 …………… 36	写真19. 土壌5 出土遺物 …………… 85
第5章. 陣ヶ原辻原遺跡	写真20. 3～4層出土土器 …………… 85
写真1. 陣ヶ原辻原遺跡全景 …………… 79	写真21. 出土土器-1 …………… 86
写真2. 東調査区遠景 …………… 79	写真22. 出土土器-2 …………… 86
写真3. 西調査区全景 …………… 79	第6章. 高瀬深ノ田遺跡
写真4. 4号竪穴建物 …………… 80	高瀬深ノ田遺跡全景 …………… 93
写真5. 4号竪穴建物の土層 …………… 80	SH1～SH3全景 …………… 93
写真6. 4号竪穴建物 土壌1 …………… 81	SX1遺物出土状況 …………… 93
写真7. 4号竪穴建物 埋土中出土遺物 …………… 81	SX1出土遺物 …………… 94
写真8. 4号竪穴建物 土壌1出土遺物 …………… 81	その他の遺物 …………… 94

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひたしたかせいせきぐんのちょうさ							
書名	日田市高瀬遺跡群の調査1							
副書名	誠和神社裏遺跡 後藤家墓地 陣ヶ原辻原遺跡 高瀬深ノ田遺跡							
巻次	1							
シリーズ名	一般国道210号日田バイパス建設に伴う発掘調査報告書							
シリーズ番号	I							
編著者名	田中裕介							
編集機関	大分県教育委員会							
所在地	〒870 大分県大分市府内町3-10-1 TEL.0975-34-1111							
発行年月日	西暦 1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
せいかじんじゅうら 誠和神社裏	大分県日田市 大字高瀬字辻原	44204-6		33°17'56"	130°56'11"	19900417 ~19900514	400	道路建設
ごとうけほち 後藤家墓地	〃	〃		33°18'02"	130°56'09"	19900510	20	〃
しんがほまつびな 陣ヶ原辻原	大分県日田市 大字高瀬 字辻原・小原	〃		33°17'51"	130°56'06"	19900418 ~19900618	1500	〃
たかせんかのた 高瀬深ノ田	大分県日田市 大字高瀬 字深ノ田	〃		33°17'45"	130°56'19"	19890601 ~19890705	1200	〃
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
誠和神社裏	集 落 跡	縄文時代 近 世	包含層 掘立柱建物2 土城3	押型文土器・石器 近世陶磁器				
後藤家墓地	墓 地	近世~近代	石製墓碑4	—				
陣ヶ原辻原	集 落 跡 畑 地 跡	古墳時代 奈良時代 近 世 近 代	竪穴1、水路1 竪穴3 島地区囲1 土城1 水路1	土師器 須恵器・土師器 陶磁器				
高瀬深ノ田	集 落 跡	古墳時代 奈良時代	竪穴3 土城3	土師器 陶磁器				

第1章 はじめに

第1節 調査にいたる経過

一般国道210号は、福岡県久留米市を起点とし、大分県日田市を経て大分市にいたる九州中部を横断する主要幹線道路である。しかし近年、交通渋滞や事故多発のために、幹線道路としての機能は低下しつつある。特に日田市街では、現道の幅員が約10mと狭いうえ、沿道の都市化により交通の隘路となった。さらに九州横断自動車道の開通にともなう交通量増加が予想された。

幹線道路の
機能低下

このような事態に対応して計画されたのが日田バイパスであり（第1図）、建設省九州地方建設局大分工事事務所により事業着手された。計画区間は日田市大字石井字串川から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長5.3kmである。西半の大字石井字串川から大字高瀬字土ヶ迫にいたる延長2.2kmが2工区、東半の大字高瀬字土ヶ迫から大字日高字小ヶ瀬にいたる延長3.1kmが3工区である。1977（昭和52）年度に事業化され、1983（昭和58）年6月28日に都市計画決定された。1987（昭和62）年度から用地着手がおこなわれ、その進捗にともなって1988（昭和63）年度から工事着手した。3工区は1993（平成5）年12月3日に完成し、供用開始した。2工区は現在用地交渉および工事中である。

日田バイパス

大分県教育委員会では、日田バイパスの路線が遺跡の存在する可能性の高い台地上を貫くことと、この地域が奈良時代には石井駅がおかれ、古代官道の路線にあたることから、路線内の遺跡の保存措置が必要と判断し、建設省九州地方建設局大分工事事務所と協議を開始した。それに基づき、1987年1月に路線内の遺跡分布調査を実施した。その結果、9ヶ所の遺跡および遺跡推定地を確認した（第1図）。東から大部遺跡（1）、手崎遺跡（2）、琴平山遺跡（3）、高瀬遺跡（4）、陣ヶ原遺跡（5）、上野第1遺跡（6）、上野第2遺跡（7）、寺内遺跡（8）、護岸寺遺跡（9）である。このうち上野第1遺跡から護岸寺遺跡までの4遺跡が2工区に、大部遺跡から陣ヶ原遺跡までが3工区に所在する。

県教委の
対応

分布調査

この分布調査の結果に基づき、建設省と大分県教委文化課は協議を進め、89年度から上記の9遺跡について発掘調査を実施することになった。

第2節 埋蔵文化財調査の経過と調査組織

第1表を参考にしながら年度をおいて、日田バイパスの埋蔵文化財調査の経過をのべる。

1988（昭和63）年度 もっとも早く工事にかかる琴平大橋の橋脚工事地区である高瀬（深ノ出）遺跡の試掘調査をおこなった。その結果堅穴建物・土壇等の遺構を確認し、次年度に本調査をおこなうことになった。この年度の調査組織は以下のとおり。

88年度の
調査

調査組織

調査主体	大分県教育委員会			
	編 織 文 雄（教育長）			
調査総括	小代基雄（教育庁管理課文化課課長）			
	阿部正博（同 課長補佐）	後藤宗俊（同 課長補佐）		
	今永一成（同 管理係長）			
調査主任	渋谷忠孝（同 埋蔵文化財第2係係長）			
調査担当	友岡信彦（同 主事）			
調査事務	西智弘（同 主任）	神昭雄（同 管理係主事）		

89年度の調査

1989(平成元)年度 前年度の試掘調査結果に基づき、高瀬深ノ田遺跡の本調査をおこなった。さらに工事着工の早い3工区を中心に試掘調査を優先し、遺跡の内容を把握することとなった。手崎遺跡は用地買収の関係で湧水谷部分のみの試掘にとどまり、後年度にさらに試掘をおこなうことになる。琴平山遺跡は、丘陵上を広く範囲に試掘調査したが遺構の検出はなく遺物も限られていた。そのため本調査の必要はないと判断し調査を終了した。陣ヶ原遺跡は広大な対象地を4地区に分けて試掘調査をおこない、その結果辻原地区で堅穴建物跡を確認し次年度に本調査をおこなう事になった。上野第1遺跡では奈良時代の掘立柱建物跡が検出されたので、後年度の本調査をおこなうこととなった。

概報 I

この年度の調査概要は、渋谷忠章・友岡信彦・吉田寛「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」(1990. 3 大分県教育委員会)に速報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会
船津文雄(教育長)

調査委員 買川光夫(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)

調査総括 後藤正二(教育庁管理部文化課課長)
後藤宗俊(同 課長補佐)
今水一成(同 管理係長)

調査主任 渋谷忠章(教育庁管理部文化課埋蔵文化財第2係係長)

調査担当 友岡信彦(同 主事)

調査員 高橋敏(同 主事) 水松みゆき(同 嘱託)
吉田寛(同 主事) 塚野和子(同 嘱託)

調査事務 西哲弘(同 主任)

90年度の調査

1990(平成2)年度 前年度の試掘調査に基づき、陣ヶ原辻原遺跡の本調査をおこなうとともに、小原地区の試掘調査を実施した。また陣ヶ原台地向かう工事用道路が建設されることになり、その部分の分布調査と試掘調査を実施した結果、誠和神社裏遺跡と後藤家墓地を確認し、誠和神社裏遺跡は引き続き本調査をおこない、後藤家墓地は墓碑調査のみをおこなった。その後、上野第1遺跡の本調査に移り、東原地区についておこなった。奈良時代の大規模な集落遺跡を検出したため調査は長期化した。そのためほかの地区の本調査は後年度に継続することになった。

概報 II

この年度の調査概要は、田中裕介「誠和神社裏遺跡 陣ヶ原辻原遺跡 上野第1遺跡(東原地区)——一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報II—」(1991. 3 大分県教育委員会)に速報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織

調査主体 大分県教育委員会
船津文雄(教育長)

調査委員 買川光夫(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)
小田富士雄(福岡大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)
後藤宗俊(別府大学文学部教授)

調査総括 後藤正二(教育庁文化課課長)
徳丸敏也(同 参事)
林英輝(同 課長補佐)
今水一成(同 管理係長)

調査主任 清水昭昭(教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長)

調査担当 田中裕介(同 主事)

調査員 坂本嘉弘(同 主事) 新宅信久(同 嘱託)
吉武敦子(同 嘱託)

調査事務 西哲弘(同 埋蔵文化財第2係主任) 山口淳史(同 管理係主事)
原浩一(同 管理係主事)

91年度の調査

1991(平成3)年度 上野第1遺跡の本調査はひとまず置き、先行する大宮大橋工事がおこなわれる手崎遺跡・大部遺跡の調査にかかることになった。まず手崎遺跡の丘陵部の試掘調査と本調査

第1表. 日田バイパス埋蔵文化財調査の経過

No.	遺跡名	88	89	90	91	92	93	94	(年度) 備 考
1	大 部				▲●				
2	手 崎		▲		▲●		●		91年度本道、93年度交差点調査。
3	琴 平 山		▲						試掘調査のみで終了。
4	高 瀬	▲	●					■	高瀬深ノ田遺跡と改名。
5	陣ヶ原		▲	●				■	陣ヶ原辻原遺跡と改名。
	誠和神社裏			▲●					
	後藤家墓地			○				■	工事用道路。確認調査のみ。
6	上野第1		▲	●	▲	●	●		
7	上野第2						▲		一部試掘調査。
8	寺 内								
9	藤 岸 寺								
	概 報	I	I	II	III	IV	V		

▲ 試掘調査 ● 本調査 ■ 報告書

を先行し、その後大部遺跡の試掘・本調査をおこなった。両遺跡とも縄文時代から近世にいたる遺構が重なっており、大規模な調査となった。また大部遺跡と並行して上野第1遺跡（野間地区）の試掘調査を実施した。その結果奈良時代の遺構はさらに西に続き、次年度に本調査をおこなうことになった。

この年度の調査概要は、田中裕介『手崎遺跡 大部遺跡 一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ-』(1992. 3 大分県教育委員会)に連報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査主体 大分県教育委員会
宮本高志(教育長)

調査委員 賀川光夫(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)
木村幾多郎(大分市歴史資料館館長)

調査総括 秋葉正嗣(教育庁文化課課長)

惣丸欽也(同 参事)
林英輝(同 課長補佐)
今水一成(同 管理係長)

調査主任 清水宗昭(教育庁文化課埋蔵文化財第1係係長)

調査担当 田中新介(同 主事)

調査員 坂本基弘(同 主事) 安倍裕子(同 嘱託)
後藤晃一(同 主事) 後藤幹彦(同 嘱託)
阿部みゆき(同 嘱託) 後藤方彦(同 嘱託)

調査事務 西哲弘(同 埋蔵文化財第2係主査) 山口淳史(同 管理係主事)
原浩一(同 管理係主事)

概 報 Ⅲ

調査組織

1992(平成4)年度 上野第1遺跡の本調査を再開した。奈良時代集落跡・水田跡、近世島地区面など多くの遺構を検出し注目を集め、93年1月24日には現地説明会を開催した。なお平原地区・米田地区は試掘調査のみで、本調査は次年度になった。

この年度の調査概要は、田中裕介『上野第1遺跡(東原・野間・平原地区)一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ-』(1993. 3 大分県教育委員会)に連報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査主体 大分県教育委員会
宮本高志(教育長)

調査委員 賀川光夫(別府大学文学部教授・大分県文化財保護審議会委員)

概 報 Ⅳ

調査組織

	後藤宗俊 (湖研大学文学部教授)
	西岡啓元H (広島大学文学部助教授)
	佐々木卓 (大分短期大学助教授)
	飯沼賢司 (宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主任研究員)
	山崎誠男 (福岡市教育委員会文化課)
調査総括	秋葉正嗣 (教育庁文化課課長)
	衛藤伸一 (同 課長補佐)
	今井義人 (同 課長補佐兼管理係長)
調査主任	清水宗昭 (教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係係長)
調査担当	田中裕介 (同 主任) 高島豊 (同 嘱託)
調査員	坂本嘉弘 (同 主査) 安倍昭子 (同 嘱託)
	小柳和宏 (同 主任) 後藤幹彦 (同 嘱託)
	山田寛 (同 主査) 吉武敦子 (同 嘱託)
調査事務	西哲弘 (同 埋蔵文化財第2係主査) 山口淳史 (同 管理係主任)
	原浩一 (同 管理係主事)

93年度の調査 1993(平成5)年度 上野第1遺跡の本調査を継続し、平原地区・米田地区を終了し、引き続き上野第2遺跡の一部の試掘調査をおこなった。また91年度の本調査をおこなった手崎遺跡の交差点接続部が工事にかかることになり、南側を2次調査、北側を3次調査として本調査をおこなった。この調査によって3工区のすべての遺跡の調査を終了した。

概報 V この年度の調査概要は、田中裕介・高島豊「上野第1遺跡(平原・米田地区) 上野第2遺跡手崎遺跡(2・3次)——般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報V—」(1994.3 大分県教育委員会)に速報されている。この年度の調査組織は以下のとおり。

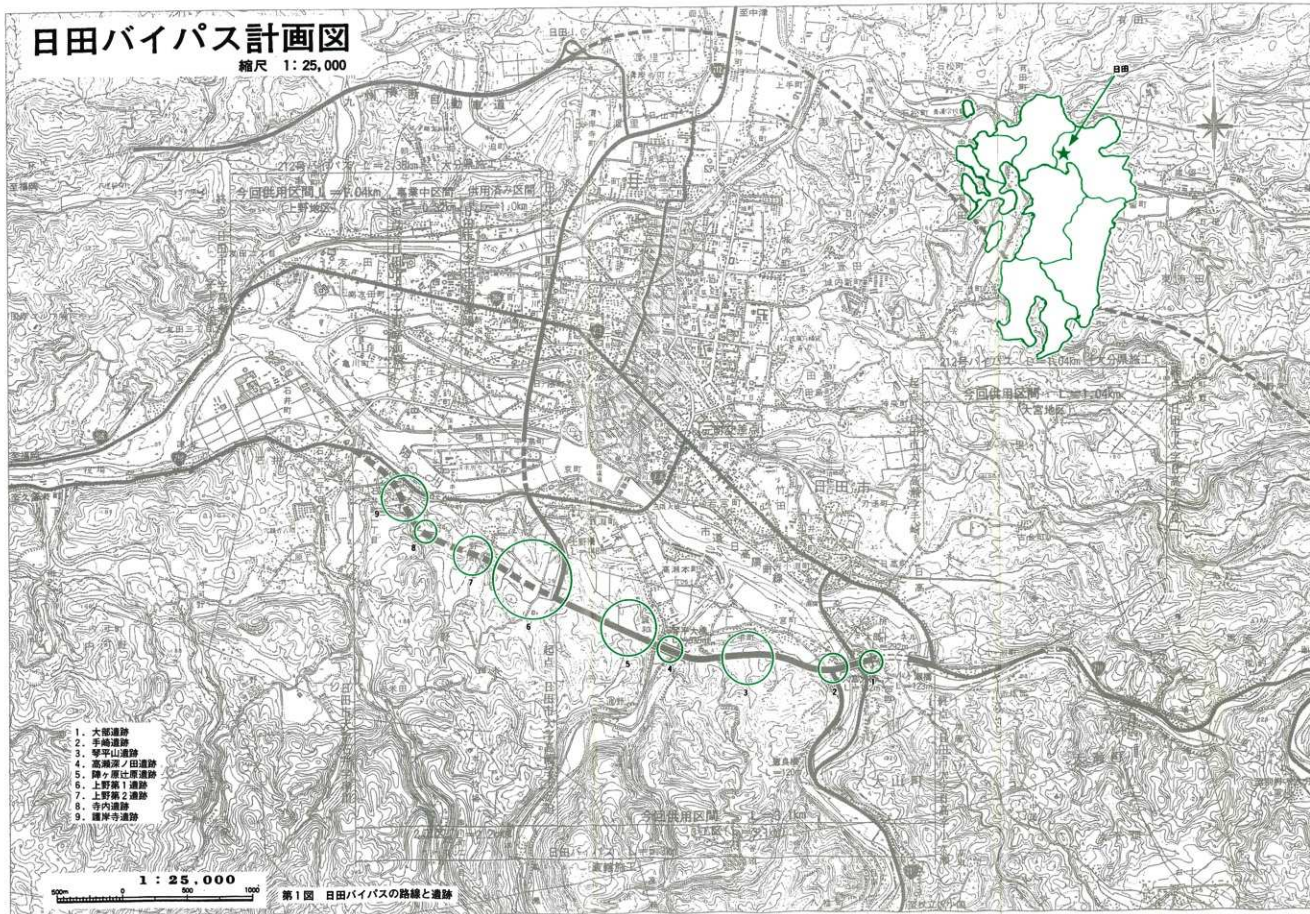
調査組織	調査主体 大分県教育委員会
	菅本高志 (教育長)
	調査委員 畑中健一 (北九州大学文学部教授)
	柳沢一男 (宮崎大学教育学部助教授)
	調査総括 末広利人 (教育庁文化課課長)
	岡忠夫 (同 課長補佐)
	埴野守止 (同 課長補佐兼管理係長)
	調査主任 清水宗昭 (教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係係長)
	調査担当 田中裕介 (同 主任) 高島豊 (同 嘱託)
	調査員 坂本嘉弘 (同 主査) 吉田寛 (同 主事)
	王永光洋 (同 埋蔵文化財第2係主査) 吉武敦子 (同 嘱託)
	小林昭彦 (同 埋蔵文化財第1係主査)
	調査事務 西哲弘 (同 埋蔵文化財第2係主査) 竹中啓司 (同 管理係主査)
	原浩一 (同 管理係主事)

94年度の調査 1994(平成6)年度 今年度は3工区の西半分(高瀬川以西)で調査した4遺跡の整理・本報告書作成をおこなうことになった。障ヶ原辻原遺跡・誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・高瀬深ノ田遺跡である。整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室でおこない、資料もそこに保管している。この年度の調査組織は以下のとおり。

調査組織	調査主体 大分県教育委員会
	帯刀啓人 (教育長)
	調査総括 末広利人 (教育庁文化課課長)
	岡忠夫 (同 課長補佐)
	小野倉吉 (同 課長補佐兼管理係長)
	調査主任 清水宗昭 (教育庁文化課主幹兼埋蔵文化財第1係係長)
	調査担当 田中裕介 (同 主任)
	調査員 坂本嘉弘 (同 主査) 高島豊 (同 嘱託)
	友岡豊彦 (同 主任) 山田尚志 (同 嘱託)
	吉田寛 (同 主事)
	調査事務 西哲弘 (同 埋蔵文化財第2係主査) 渡辺俊樹 (同 管理係主査)
	原浩一 (同 管理係主事)
	整理作業 中山ツヤ子 坂本久美子

日田バイパス計画図

縮尺 1:25,000



第3節 調査日誌抄

1989年度と1990年度の今回報告する4遺跡の調査日誌を抄録する。

1989(平成元)年

高瀬深ノ田遺跡(本調査)

- 6月1日(木) 高瀬深ノ田遺跡の重機による表土除去開始(～6日、友岡・吉田)。
 6日(火) 拠点プレハブを高瀬に建て、発掘器材搬入。
 7日(水) 作業員による遺構検出作業開始(～15日、友岡)。プレハブでは器材搬入と電話の取付け。
 9日(金) 堅穴遺構と溝遺構検出。
 13日(火) 梅雨が始まる。水田下の調査で水抜き作業におわれることになる。
 15日(木) 遺構検出写真撮影(高橋・友岡)。
 19日(月) 排水の扱いについて建設省・日田市教委と協議(清水・西・七居和幸<日田市博>)。高瀬小学校6年生見学。
 20日(火) 測量杭の設置と、遺構掘り下げ開始。
 22日(木) 排水の扱い現場打ち合せ。日田市教委原田学校教育課課長祐佐、都市計画課、業者、渋谷・友岡。
 23日(金) 水中ポンプ現場へ。
 26日(月) 遺構写真撮影。標高移動。
 27日(火) 遺構実測開始。
 7月4日(火) 遺跡全景写真撮影。建設省排水の件で視察。
 5日(水) 実測終了。現場片付け。高瀬深ノ田遺跡の本調査終了。
 6日(木) 高瀬深ノ田遺跡の重機による埋め戻し(～7日)。

陣ヶ原遺跡(試掘)

- 8月22日(火) 竹ノ下地区から試掘調査開始。1・2トレンチ掘り下げ(～24日、友岡)。遺構確認作業。すぐに岩盤に達し、遺構なし。
 24日(木) 竹ノ下3トレンチ開始(～25日)、辻原地区1・2トレンチ開始(～25日)。
 25日(金) 辻原地区3・4・5トレンチ開始(～9月8日)。竹ノ下地区1・2・3トレンチ、辻原地区1・2トレンチ写真撮影。竹ノ下地区試掘終了。
 9月8日(金) 辻原地区6・7トレンチ開始(～10月4日)。この間天候不順。堅穴遺構等検出。
 20日(水) 辻原地区8・9トレンチ開始(～10月6日)。
 10月6日(金) 小原地区1トレンチ開始(～13日)。
 9日(月) 小原地区2・3トレンチ開始(～17日)。
 12日(木) 辻原地区3～8トレンチ写真撮影。
 16日(月) 小原地区4トレンチ開始(～24日)。
 25日(水) 小原地区5トレンチ開始(～11月10日)。
 11月8日(水) 小原地区6トレンチ開始(～10日)。
 14日(火) 辻原地区9・10トレンチ開始(～17日)。

20日(月) 発掘器材撤去。陣ヶ原遺跡の試掘調査終了。

1990年度

誠和神社裏遺跡・陣ヶ原辻原遺跡・後藤家墓地(本調査)、陣ヶ原小原地区(試掘)

- 4月9日(月) 現地地下見・打ち合せ(清水・友岡・田中)。
 16日(月) 拠点プレハブ再開。現地に器材搬入。
 17日(火) 工用道路下の試掘開始(～19日、田中・新宅)。遺構は少ないが遺物は多い。
 18日(水) 陣ヶ原辻原遺跡の重機による表土除去開始(～19日)。工用道路部分の遺跡を誠和神社裏遺跡と命名。本調査をおこなうことになった。
 23日(月) 陣ヶ原辻原遺跡の遺構検出作業開始(～25日)、堅穴遺構4基と溝多数を検出。測量杭を設定。
 24日(火) 誠和神社裏遺跡の表土除去、柱穴検出。陣ヶ原辻原遺跡、平板による遺構配置図作成。土居氏来訪。
 25日(水) 誠和神社裏遺跡の遺構検出作業開始(～26日)、掘立柱建物跡2基と土壇発見。
 27日(金) 誠和神社裏遺跡の遺構掘り下げ、実測開始(～5月8日)。陣ヶ原辻原遺跡、2号溝掘り下げ。
 5月8日(火) 誠和神社裏遺跡の平板測量、全景写真。
 10日(木) 誠和神社裏遺跡の土壌実測・写真撮影。縄文調査区掘り下げ(～11日)。後藤家近世墓地調査(坂本・田中・新宅)。
 11日(金) 誠和神社裏遺跡の縄文調査区実測・写真撮影。誠和神社裏遺跡の本調査終了。
 15日(火) 陣ヶ原辻原遺跡の遺構掘り下げ開始。1号溝(～16日)、2号溝(～24日)、2号堅穴(～17日)、1・2号土壇(～16日)。
 22日(火) 2号堅穴の実測写真撮影。1号堅穴掘り下げ(～25日)。
 28日(月) 2号堅穴の実測写真撮影。
 30日(水) 3号堅穴掘り下げ(～6月6日)。
 31日(木) 1号堅穴カマド調査。4号堅穴掘り下げ(～6月6日)。
 6月5日(火) 1・2号堅穴カマド調査。5・6号土壇調査。
 6日(水) 全景写真撮影。
 8日(金) 小原地区試掘調査再開(～7月5日)。
 13日(月) 3号堅穴実測・完掘写真。
 14日(木) 4号堅穴実測・完掘写真。行時志郎(日田市博)来訪。
 18日(月) 陣ヶ原辻原遺跡完掘写真撮影。現場片付け。陣ヶ原辻原遺跡本調査終了。
 7月5日(木) 小原地区試掘調査終了。

第2章

高瀬周辺の地理と歴史



第1図 日田盆地の位置

第2章 高瀬周辺の地理と歴史

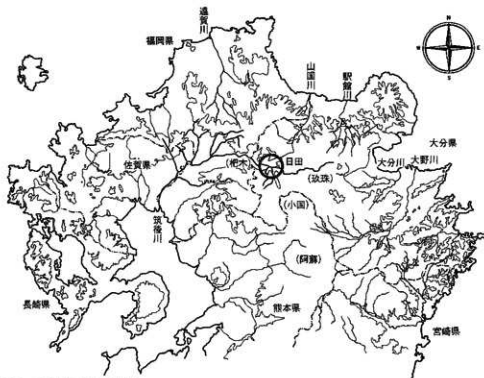
第1節 日田盆地の位置と地形

高瀬遺跡群の所在する日田盆地は、九州のほぼ中央に位置する（第1図）。現在の行政区分では大分県日田市に属し、古代以来の行政区画では西海道豊後国日田郡にあたる。日田市は大分県の最西部に位置し、水系的には筑後川流域に属し、北部九州と関係が深い。また日田盆地中央からみて、西に筑後川を下ると福岡県杷木・朝倉にいたり、東に遡ると玖珠盆地にいたる。北に大石峠をこえると豊前平野、北西に山を越えると福岡県の遠賀川流域にでる。さらに南に大山川を遡ると熊本県小国町にて阿蘇に通じる（第2図）。日田盆地は一見山間の小平野のように見えるが、このように筑前・筑後・豊前・豊後・肥後にある交通の要衝に位置し、そのため江戸時代には九州全体を支配する西国郡代が置かれている。

九州の中央

筑後川水系

四通八達



第2図 日田盆地の位置と地勢

日田盆地の地形

日田盆地の地勢を千田昇氏の研究を紹介しながら述べる（第3図）（註1）。

千田氏の研究

日田盆地の盆地底は標高65mで、盆地中央は標高75～90mである。その外周の標高120～200mに平坦面が広がる。これは今を遡る約8万年前に噴出した阿蘇4火砕流の堆積面としての台地面である。

日田盆地は火山活動の影響を受けた地形で、更新世の約90万年前の耶馬溪火砕流、8～7万年前の阿蘇4火砕流により盆地の埋積がおこなわれ、現在の盆地は阿蘇4火砕流による埋積からの開析過程にある。次の8つの地形面からなる。高位から順に説明する。

8つの地形面

1. 一尺八寸山緩斜面 日田盆地周辺で最高位の地形面で、一尺八寸山とその西方に分布する。この緩斜面の高度は西部で350m、東方の一尺八寸山では700mに達する。全体が開析されて尾根



- 1:一尺八寸山緩斜面 2:耶馬溪火砕流台地面 3:阿蘇4火砕流堆積面 4:中位段丘1面
5:中位段丘2面 6:低位段丘1面 7:低位段丘2面 8:低位段丘3面 9:沖積面 10:河運跡

第3図 日田盆地の地形分類図 (千田昇「日田・玖珠地域の地形」第2図を再トレース)

上になった山頂緩斜面である。鮮新世後期の約271万年前の一尺八寸山安山岩により形成されている。

2. 耶馬溪火砕流台地面 97-90万年前に玖珠盆地南方の猪牟田カルデラから噴出した耶馬溪火砕流により形成された台地面である。盆地の北部と南部に分布し、北部の有田川北岸の尾当町で典型的にみられる。分布高度は一尺八寸山麓で約500m、西方に高度を下げ、尾当町で約340m有田町で200mである。盆地南部では開析が進み、尾根状になって分布する。高度は女子畑で200-270m、谷頭で300m、傘木で360m、梅の木で250mで、基本的に盆地中央に向かい高度を下げる。

3. **阿蘇4火砕流堆積面** 盆地周縁部に満遍なく分布している。阿蘇4火砕流は日田盆地に流入して標高200m辺りまでは完全に埋め尽くし、平坦な堆積面を形成した。その後現在の日田盆地の地形面はこの阿蘇4火砕流の堆積面を開析して形成された。
4. **中位段丘1面** 阿蘇4火砕流堆積面の下位に比高10～30mの崖を作って分布する地形面である。盆地北部の貞清から朝日町にかけては標高110～150m、盆地南部の降ヶ原では標高120～150m、盆地西部の北友田では120～150mである。阿蘇4火砕流堆積面の開析過程において、筑後川の盆地からの出口が塞がり、下方侵食が一時的に停滞した時期に、側方侵食が拡大した時期の河成段丘面と推定される。
5. **中位段丘2面** 阿蘇4火砕流堆積面がさらに開析されたときの地形面である。盆地内では阿蘇4火砕流堆積面や中位段丘1面の縁辺部のみみられる。
6. **低位段丘1面** さらに盆地底が低下して形成された河成段丘面、盆地出口の高井町で標高70～80m、中南部の高瀬本町で90～110mに分布する。
7. **低位段丘2面** 沖積面から数m高い面である。
8. **沖積面** 現在の盆地底を形成する地形面である。河道跡がきわめて明瞭である。高度は高井町でもっとも低く標高65m。盆地入り口の日高町では100m、花月川と小野川の合流点付近で120mである。

以上の地形分類をもとに千田氏は日田盆地の形成過程を次のように総括している。

日田盆地では耶馬溪火砕流形成の後、長い侵食期に入り、その結果、広い日田盆地（古日田盆地）が形成された。今からおよそ7～8万年前に阿蘇4火砕流が古日田盆地を埋め尽くし、高度140～200mのきわめて平坦な広い堆積面を形成した。

その後、筑後川水系はこの堆積面を開析する過程に転じ、下方侵食と側方侵食を繰り返し現在の盆地を形成してきた。中位段丘1面は阿蘇4火砕流が堆積してから、それほど時間が経過しない時期に形成された面である。また浅い谷として残されているこの段丘面上の河道も自由蛇行の跡を残しており、火砕流堆積後下方侵食がそれほど強くない状態で、河道が自由に流れその結果、比高10m以下の小崖によって火砕流堆積面と隔てられたものと推定される。したがって中位段丘1面は、河成段丘としては高位置にある。中位段丘2面以下の段丘面は、下方侵食がほとんど現在の水準まで達したことで形成された段丘面である。

盆地の
形成過程

第2節 三隈川南岸の地形

第4図は千田氏の地形分類図（第3図）をもとに、調査遺跡と湧水点を加え、本報告の内容に從って改変したものである。この地図をみながら説明していこう。（註1）

2-1 地形区分の説明

下位沖積面 三隈川南岸地域の北は三隈川の沖積地に接し、東は大山川を東限とする。地形の全体は北から南に高くなり、高瀬川と石井川の2つの中河川が北流して三隈川に合流する（註2）。基本的な地形変化を標高の低い三隈川の本流域からみていくと、まず沖積地としては東から惣田地区の小島沖積面、鏡酒・高瀬の沖積面、石井地区北側の三隈川の蛇行部に位置する沖積面が分布する。

三隈川の
沖積地

これらの沖積地はいずれも三隈川本流の旧河道が連続した地形で、洪水時には河川敷に戻ってしまうという性質をもっており（註3）、現状では1部を除いて全面的に水田化されている。ここでは下位沖積面と呼んで、後述する上位沖積面と区別しておきたい。下位沖積面が全面的に水田化されたのは近世であって、標高の高い微高地面まで開発するため、三隈川の本流よりも水位の高い中河川に井

現状水田

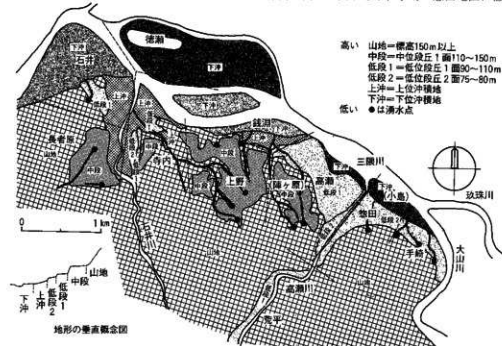
堰を築いて取水している。たとえば惣田地区の小島は大山川に、石井地区の沖積面は石井川の河口近くに井堰を設けて水路導水をしている。これに対して中河川が近くにない銭淵下位沖積面では、旧河道部の低地のみは水田として利用されているが、微高地上は近代にいたるまで水田化できなかった。

小河川流域

上位沖積面 小河川流域に分布する沖積面をこう呼んで区別する。流域面積は狭いものの下位沖積面に比べて洪水の影響を受けにくく、井堰から水田までの距離が短く、周辺の段丘や山地から流れこむ天水などを多角的に利用できるという利点をもっている。このような沖積面を上位沖積面と呼ぶことにする。三隈川南岸にはこのような上位沖積面は3箇所存在する。銭淵の上位沖積面は陣ヶ原と上野の両段丘の間を流れる零細な小河川を水源とする沖積面で、流域面積は狭いが洪水の心配はない場所である。寺内の谷底沖積面は石井川のさらに支流の小河川が流れる谷底の低地である。もう一つ所は石井川の下流域で、この沖積面は流域面積が広く下位沖積面と同じ性質をもつが段丘の縁辺部は比較的安定している。

「原(はる)」

低位段丘 以下にのべる段丘とは、日田地方で「原(はる)」と呼ばれている台地のことである。千田の研究によると低位段丘は標高の低い2面と標高の高い1面があり、手崎・惣田地区に低位段



(千田昇「日田・玖珠地域の地形」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』1992. 大分大学教育学部, を改変)

第4図 三隈川南岸の地形

丘2面、高瀬地区に低位段丘1面、寺内地区に低位段丘1・2面と、石井地区に低位段丘1面の4箇所が分布している。

中位段丘 千田の分類による中位段丘1面である。この地域では最も高位の段丘面で、背後に山地が連なる。高瀬地区の陣ヶ原中位段丘、上野地区の中位段丘、寺内地区の中位段丘、長者原の中位段丘の4箇所に分布する。

段丘地形の特徴 地形の特徴として段丘面上には湧水点は何箇所もあり、その湧水が開析する浅

湧水谷 湧水谷が平坦な段丘面上にアクセントをつけている。湧水谷は比較的水田開発が容易であるが、段丘面そのものは大規模な灌漑施設を建設しないかぎり水田化は不可能である。とくに河川との比
高地 差の著しい中位段丘面はその傾向がいちじるしい。したがって段丘面は畠地として開発対象となるか、あるいは山地の延長としての役割をはたすことになりやすい。以上の段丘地形は三隈川南岸

の景観の特徴をなすものであり、上位沖積面よりもはるかに広い面積をしめている。

ところで現在の段丘面上はかなり平坦な景観を呈しているが、この景観は、近世の畠地整理、近代の水田開拓をへて整えられた人工景観である。上野中位段丘面に立地する上野第1遺跡の調査で段丘面の旧地形を観察したが(註4)、その結果近世の畠地整理以前は、比高1m内外の小起伏が連なっており、かなり凸凹した景観であったと推定される。つまり高峻な高位地形と水のたまりやすい窪み(ただし保水力はない)が連続し、その微地形変化に適應した利用がおこなわれていたと推定される。したがって段丘面を平坦化して均質な土地条件を作り出した近世の畠地整理以前には、微地形に応じて畑地・畠地・林・採草地・自然林がモザイク状に広がっていたと推定される(註5)。

湧水谷 湧水谷とは、段丘上に点々と所在する湧水が流れる際に開析した狭い浅い谷である。湧水点が山地から段丘面への変換点に存在するため、段丘面上では緩い傾斜の浅く広い池状の地形になるが、段丘の斜面を開析する際には急傾斜で狭く深い谷となるという地形の特徴がある。そのために湧水点に近い段丘上のほうが開発しやすい状況である。少面積ながら安定した湧水を利用した湿田として利用されており、収量は乾田に劣るが旱魃時にも不作になることはない安定度の高い水田となる。

山地 段丘の南に連なる急峻な地形の部分で平坦地は少ない。現在はほとんど杉林になっているがかつてはかなり天然林を残していた。森林資源・動物資源の採集対象地として縄文時代以来利用されてきたが水田化畠地化されているところはほとんどない。

2-2 高瀬地区の人文地理 (第4・5図)

三隈川に面する低位段丘1面と、その南の陣ヶ原の中位段丘1面からなり、さらに南は山地になる。陣ヶ原の中位段丘1面には湧水点が2箇所あり、そこから開析した湧水谷が3筋存在する。高瀬低位段丘1面には14町の区画をもつ条里水田が広がり、銭淵地区方向に下る湧水谷が1箇所ある。

陣ヶ原中位段丘1面は現在は水田だが、1920年代以前は畠地と、陣ヶ原辻原遺跡が立地する湧水谷水田からなっていた(註6)。この景観は、陣ヶ原の段丘面が近世に畠地境界溝によって区画されて面的な畠地化が進行する点を除けば、条里開発以前までさかのぼるものと考えられる。

高瀬低位段丘1面 それでは低位段丘1面の高瀬条里はいつ開発されたのであろうか。高瀬地区の条里地割りのなかに中世在地領主の高瀬氏の館跡が地名から推定される(じんしゅうじ・かじやその・おおその・みやその・しろ)ほか、中世寺院永平寺(いひじ)の遺構と石造物群が存在し、その記年銘から鎌倉時代までさかのぼることが確認される(註7)。つまりこの条里水田面は中世領主高瀬氏の基盤となった場所であり、高瀬氏が館を構えた鎌倉時代には少なくとも条里遺構は存在し、その経営によって在地領主としての権力を維持したと考えられる。しかし条里遺構が高瀬氏によって施工されたとは考えにくい。というのも①日田盆地の古代の開発の事例から見ると、11世紀の別荘開発の推定地にはいずれも条里遺構が残されていないから(註8)、条里遺構の施工はそれ以前にさかのぼる可能性が高いこと。②近世まで主要な開発の対象とならなかった隣の上野中位段丘面に、奈良時代にのみ大規模な集落遺跡が展開する(上野第1遺跡)。この遺跡は在地の首長のおこないうる規模、つまり郷や郡のレベルをこえた開発の在り方を背景にもつと考えられる。したがって高瀬地区の条里開発は奈良時代から平安時代前半期ごろに石井駅や官道の設置、上野第1遺跡の建設などともなう一連の国家的事業の一環としてなされた可能性が高いと考える。

条里開発以前の高瀬地区の低位段丘1面の土地利用を具体的に考える材料は少ないが、①段丘面東部に湧水谷がない点や、②高瀬低位段丘西端に位置する古墳時代中期の塚塚古墳(註9)は、この段丘面を生産基盤にした集団の首長墓ではなく銭淵地区の沖積面を拠点とする首長墓と推定されるから、高瀬地区は銭淵地区や惣田地区の集落の後背地として部分的に畠地などに利用され、古墳時代の集落の居住区にはなっていなかったと思われる。集落領域のなかでも利用度の少なかった土地

小起伏の
連

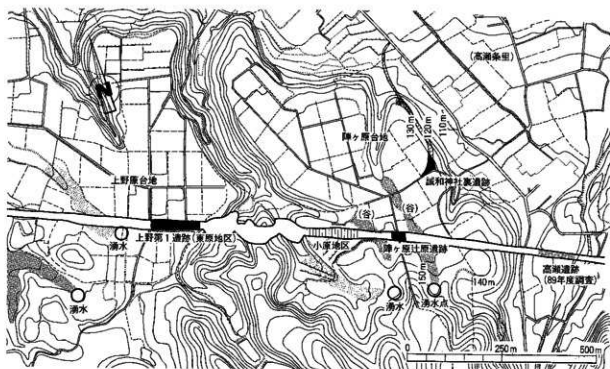
漣
田

杉
林

条里水田

中世館跡

であったと推定される。



第5図 調査遺跡の位置と周辺地形

第3節 日田三隈川南岸の歴史

高瀬地区を中心とした三隈川南岸に焦点をあてて、日田盆地の歴史を略述する。()内の数字は第6図の遺跡番号と対応する。

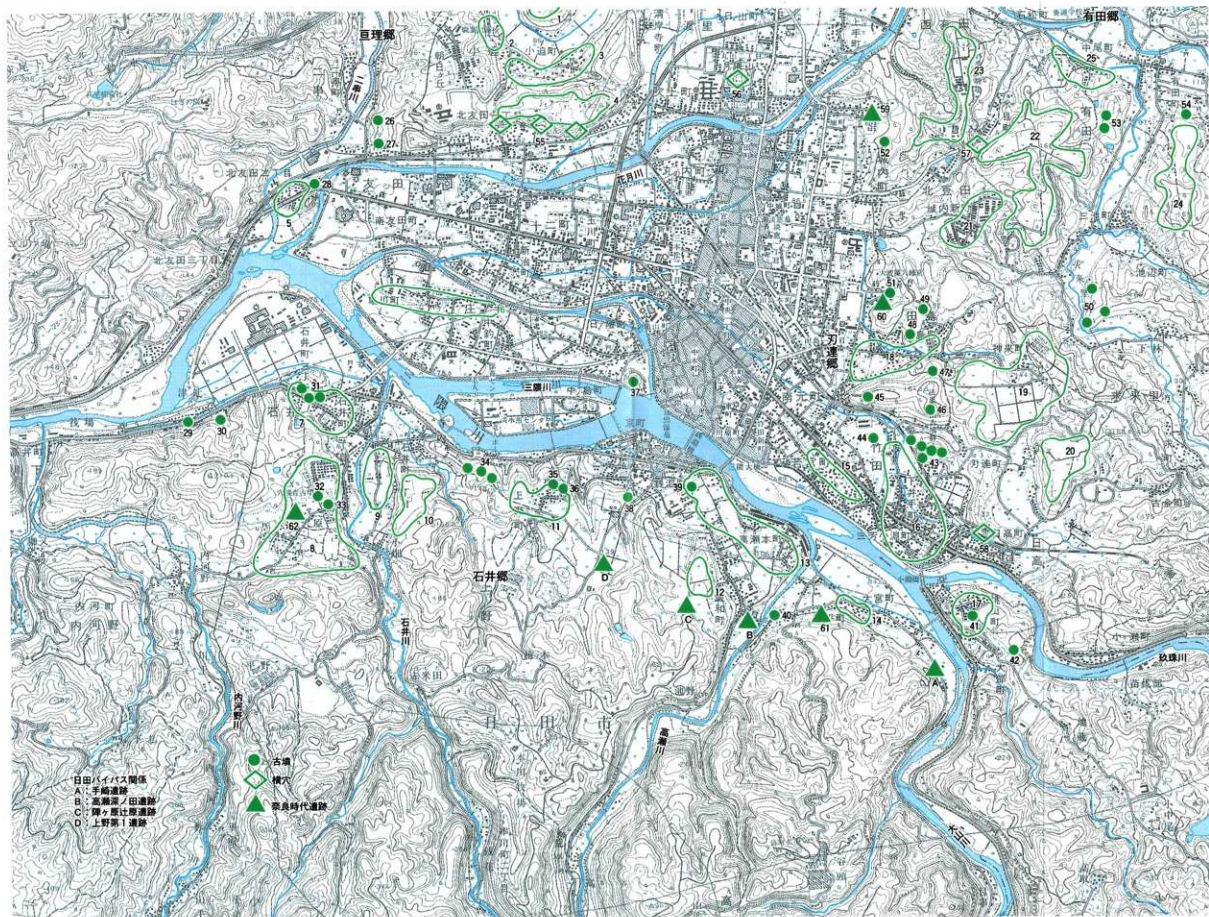
旧石器時代 **旧石器・縄文時代** 旧石器時代の遺物が採集できる場所が、日田盆地各所に点在している。三隈川南岸には、段丘上に点在する。石井地区の長者原遺跡(8)ではナイフ形石器・細石刃が採集され、さらに長者原遺跡の南西に位置する平野遺跡でも三稜尖頭器などが採集されている(註10)。日田バイパス関係では低位段丘上の手崎遺跡で豊岳産黒耀石製の野岳休場型細石器が採集されている(註11)。

縄文時代 縄文時代になると遺跡は数を増し、段丘上に点々と存在するようになる。とくに三隈川南岸一帯は日田盆地のなかでも縄文遺跡の多いところである。低位段丘面から中位段丘面におおく存在し、手崎遺跡(A)や長者原遺跡(8)のように近隣に湧水点を望む条件のよい場所には、縄文時代早期から晩期にかけて繰返し居住地として使われている(註12)。このような「拠点遺跡」とは別に特定の時期のみ立地する小遺跡が知られている。大部遺跡で早期と晩期、誠和神社裏遺跡で早期、上野第1遺跡(D)で晩期の遺物が知られており、日田盆地の環境に適応しつつ生活の拠点をここに定めた縄文集団が盆地内に創設したと考えられる。

弥生時代 前期後半から始まる吹上遺跡(4)、小迫辻原遺跡(1)をはじめ、前期末から中期にかけて、弥生集落が盆地全体に分布するようになる。その大半が沖積地を見下ろす台地の級辺部に立地する。高瀬地区でも陣ヶ原遺跡(12)、高瀬遺跡(13)がそうである。一方沖積地の微高地にも徳瀬遺跡(6)、柳本遺跡(15)等の集落が立地する。

その後弥生時代後期後半には大半の遺跡は台地上から姿を消し、台地上は墓地になる。

台地上の
集落



- 弥生集落跡**
1. 小迫辻原
 2. 森本
 3. 鍛冶原廻り
 4. 吹上
 5. 三郎丸
 6. 龍
 7. 辰園
 8. 長者原
 9. 尾坪
 10. 赤塚
 11. 上野
 12. 陣原
 13. 高瀬
 14. 惣田
 15. 柳の本
 16. 上井手
 17. 横山
 18. 会所宮
 19. 元宮
 20. 東寺原
 21. 湯尻
 22. 中尾原
 23. 佐寺原
 24. 繁辺
 25. 宮ノ下

- 古墳・横穴**
26. 鳥越古墳
 27. 片山石棺
 28. 三郎丸古墳
 29. 津注1号墳
 30. 津注2号墳
 31. ガランドヤ古墳群
 32. 穴観音古墳
 33. 倉原古墳
 34. 藤原寺古墳群
 35. 蛇塚古墳
 36. カグネ塚古墳
 37. 日隈古墳
 38. 鏡瀨石棺
 39. 龍塚古墳
 40. 惣田塚古墳
 41. 千人塚古墳
 42. 牧原古墳群
 43. 法恩寺古墳群
 44. 鬼塚古墳
 45. 虎羽塚古墳
 46. 会所山古墳
 47. 田島古墳
 48. 丸尾古墳
 49. 丸尾神社古墳
 50. ガニタ古墳群
 51. 渡部家山古墳
 52. 丸山古墳
 53. 中尾古墳群
 54. 平島古墳
 55. 北友田横穴群
 56. 月原横穴群
 57. 水日横穴群
 58. 東寺横穴群

- 奈良時代遺跡**
59. 藤原山
 60. 大波塚
 61. 惣田
 62. 長者原田遊

第6図 日田盆地の主要遺跡 (1/25,000)

古墳時代 この時代は後の奈良時代に成立する5郷の前身となる政治的単位が成立する時代である。小迫辻原遺跡(1)の「豪族居館」の出現からみて、古墳時代の当初から前方後円墳体制に組み込まれたことは明らかであるが、前中期には前方後円墳は存在せず、後期になって初めて首長墳に前方後円墳が採用される。すなわち後の亶理郷にあたる政治的領域に天満1・2号墳、有田郷に有田古墳、石井郷に護岸寺1号墳(34)が築かれる。刃速郷には前方後円墳ではないが法思寺古墳群(43)が営まれる。高瀬地区を含む三隈川南岸地帯は後に石井郷に編成されることになり、その前身となる政治単位の首長は護岸寺1号墳から石井地区のガランドヤ古墳(31)・穴観音古墳(32)に移動すると推定される。高瀬地区にも中期の円墳、姫塚古墳や、惣田地区には後期の横穴式石室墳惣田塚古墳が知られている。

古墳時代後期には日田地域に「比多国造」がみえ、盆地全体がひとつの政治的領域とみなされたと推定され、欽明朝には日下部君の祖臣阿白が初部として仕えたという記事が「豊後国風土記」にみえる。

奈良時代 7世紀後半には日田地方には日田評が設定され、日下部氏が評督・評造に任命されたことは、「久須評」木簡の存在から間違いない。その後日田評は豊後国に属することになり、701年の大宝律令の制定により日田郡となる。日田郡は初編・石井・在田・亶理・夜間(5郷)からなり、高瀬地区は石井郷に含まれる。また石井郷内には石井駅がおかれていた。その具体的所在地については定説はない。しかし駅が置かれているのであるから、高瀬地区周辺に古代官道が存在した可能性は高い。また、日田郡は下郡で大領・小領・主帳の3名の郡司が任命された。いずれの郡司も日下部を名乗り、古墳時代以来の日田の首長はみな「日下部」姓を名乗っている。

条里制の遺構としては高瀬の低位段丘上に高瀬条里があるほかは、三隈川南岸には明確な条里はない。高瀬地区周辺では、手崎遺跡・陣ヶ原辻原遺跡・上野第1遺跡・長者原田迎遺跡等の奈良時代の集落遺跡が知られている。

平安時代 9世紀には前豊後国介中井王が日田郡に本拠をおいて「悪政」をおこなう。彼の私宅がどこにあったか不明だが、筑後・肥後に浮浪したという点からみると、交通路からみて石井郷に本拠をもった可能性もある。

11世紀中ごろには日下部為行による「別名」開発がおこなわれ、三隈川南岸でも「石井別符」の開発が行なわれている。同時にこの開発が日下部氏による最後のものであり、以後日田郡は大蔵氏の時代になる。別符の開発地点からみて日下部氏の本拠は初編郷にあり、一方、大蔵氏の拠点は花月川流域を拠点としたと推定される。12世紀の大蔵氏の抗争のなかで、大蔵氏「重代の郎従」として高瀬氏が文獻にはじめて登場する。「高瀬」氏を称する点からみて、三隈川南岸の高瀬地区に土着した土豪であり、現在の高瀬条里付近を拠点にして成長したと推定される。以後高瀬氏は16世紀までその地位を継承する。

12世紀後半に日田盆地の大半は日田大蔵氏によって寄進され日田荘(金剛心院領)となり、三隈川南岸は石井別符をのぞいて、すべて日田荘にぞくしたと推定される。

鎌倉・室町時代 日田大蔵氏は地頭職を源頼朝より安堵され御家人となった。15世紀中ごろに大蔵姓日田氏は断絶し大友姓日田氏に交替する。その大友姓日田氏も16世紀前半に断絶し、以後戦国時代には、日田郡の支配は守護大友氏より指名された「郡老」にゆだねられた。その当初の郡老6名のなかに高瀬山城守の名があり、中世をつうじて日田氏の有力被官として推移したことを示している。

この時代の遺跡としては、高瀬低位段丘上に立地する中世寺院永平寺(いひじ)跡があり、現在水田内に礎石と板碑群が残り、板碑には1311(応長元)年と1313(正和2)年の銘がある。12世紀中ごろに創建され、16世紀中ごろに廃寺になったと伝えられている。

後期古墳

比多国造

日下部君

「日田評」

石井郷

条里遺構

中井王

石井別符

大蔵氏

高瀬氏

日田荘

郡老

永平寺

板碑

- 普門寺** また惣田地区には14世紀ごろに創建されたと推定される普門寺がある。1409（応永16）年銘の木造笑巖和尚像が伝来している。
- 天領** **江戸時代** 大友氏除国後、豊後国は太閤蔵入地となり、高瀬氏は帰農して高瀬村の庄屋となる。日田地方は大半が江戸幕府直轄領として幕末にいたる。高瀬地区は当初高瀬村その後、北高瀬・南高瀬・西高瀬の3村となっている。享保年間に西高瀬村の沖積地に小島井堰が開削され水田化される。
- 高瀬村** **近現代** 明治維新により1868（明治元）年日田地方は日田県となり、1872（明治4）年大分県に編入される。高瀬地区は大分県日田郡となり、1875（明治8）年北高瀬・南高瀬・西高瀬の3村は合併して高瀬村に、さらに1889（明治22）年には上野村を合併し、推移する。1910～20年代に高瀬村の中低位段丘上を水田化する大規模な耕地整理事業が行なわれる。1940（昭和15）年、日田市に編入され現在にいたる。
- 日田市**

＜注および参考文献＞

- 註1 千田昇「日田・玖珠地域の地形—とくに台地地形について—」『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』1992 大分大学教育学部
- 註2 本稿では、近世以後に開発された三隈川本流域を大河川、その支流の大山川・高瀬川・石井川など奈良時代以後の技術段階ではじめて直接取水可能となった川を中河川、それ以前の技術段階で利用可能な中河川の支流を小河川と呼び分ける。
- 註3 近代になっても1889年、1951年の洪水では水田全体が流出するような被害にあり、復興に10年以上の年月をついやしている。
- 註4 田中裕介「上野第1遺跡—一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ—」1993 大分県教委
- 註5 畑地は焼畑などの移動する粗放な耕地、畠地は常高的な毎年耕作可能な耕地、林は人為的な手入れや植樹によって作られた人工的なものと考えている。
- 註6 田中裕介「誠和神社裏遺跡 降が原辻原遺跡 上野第1遺跡—一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ—」1991 大分県教委
- 註7 永平寺板碑群には、1311年と1313年の碑銘があり、12世紀後半に寺院を開創したという伝承をもつ。大神信證「資料」『日田市史』1990 日田市
- 註8 西別府元日「古代」『日田市史』1990 日田市
- 註9 賀川光夫「大分県における三つの壑穴式石郭を有する古墳」『西日本史学』15 1953 土居和幸『日田地区遺跡群発掘調査概報』Ⅲ 1988 日田市教育委員会
- 註10 穴井通照「旧石器・縄文時代」『日田市史』1990 日田市
- 註11 田中裕介・高島豊「上野第1遺跡（平原・米田地区） 上野第2遺跡 手崎遺跡（2・3次）—一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ—」1994 大分県教委
- 註12 この大規模な2遺跡でも縄文時代中期の遺物はきわめて少なく、大分県全体の動向と一致する。以上の記述にあたっては、とくに次の文献を参照にした。
- 『日田市史』1990 日田市
- 『日田・玖珠地域—自然・社会・教育—』1992 大分大学教育学部
- 『大分県土地改良史』1979 大分県農政部耕地課

第3章

誠和神社裏遺跡

要 項

1. **試掘調査** 1990(平成2)年4月17日～4月19日
調査担当者 新宅信久・田中裕介
2. **本調査** 1990(平成2)年4月24日～5月14日
調査担当者 田中裕介・新宅信久
調査中、渋谷忠章・西智弘・松本康弘(以上県文化課)、土居和幸(日田市立博物館)の指導助言を現地でえた。
3. **整理作業** 1994(平成6)年度
遺物の実測・写真撮影は田中があたり、石器実測については高島豊・山田尚志があたった。図面浄書は西村しのぶ・阿部みゆき・田中があたった。
4. **報告書作成** 1994(平成6)年度
本章の編集執筆は田中があたった。
作成中、宮内克己・後藤一重(以上県文化課)、土居和幸・行時志郎(以上日田市立博物館)の各氏に助言をえた。
5. **例言**
遺構図の方位は磁北(M.N.)で表示した。真北からの偏差は西6度40分(1960年)。ただし第1図は真北表示。

第3章 誠和神社裏遺跡

第1節 誠和神社裏遺跡の調査経過と概要

誠和神社裏遺跡は日田市大字高瀬字辻原に所在する。近世江戸時代の小宅地遺跡である。概報では奈良時代の「小宅地」遺構として速報したが、遺物整理の結果近世の遺構と考えるほうが適正と判断した(註1)。あらかじめお詫びしておきたい。遺跡は地形的に、陣ヶ原中段段丘面から高瀬低位段丘1面に下る斜面のすぐ上、段丘面の端(標高135-140mあたり)に位置している。現在の地目は水田である。

遺跡の所在

概観の訂正

字辻原の範囲のなかに、試掘調査の結果2箇所の遺跡を確認し、第5章で詳述する遺跡を陣ヶ原辻原遺跡と名づけていたため(註2)、この遺跡は、陣ヶ原辻原遺跡と区別するために、調査区の隣に所在する誠和神社にちなんで、誠和神社裏遺跡と命名した。

この遺跡は、日田バイパス建設用の工事用道路内の分布調査の際に注意されたものである。試掘調査の結果、弥生時代から中近世の遺物および柱穴群が検出され、本調査をおこなう必要のある遺跡であることが判明し、陣ヶ原辻原遺跡の本調査と并行しておこなった。調査の範囲は、試掘調査の結果近代(1910年代)の水田化による削平の程度が少ないと判断された2枚の水田面である。調査方法は、まず重機で現在の水田耕作土と水田床土を除去し、その際台地基盤層面と水田化時に埋め立てた土層とを識別し、その上で水田化時の埋めた層と下部の旧高地耕作土層を重機で除去した。そして、遺構検出作業をおこない、各遺構を掘り下げていった。

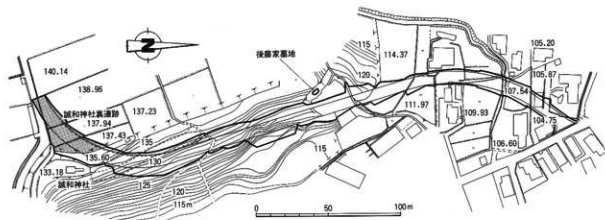
調査経過

その結果、掘立柱平地建物2棟と土壇3基、柱穴多数を検出した。また遺構検出時に縄文時代早期の押型土器を数点検出したため、縄文時代早期の包含層が存在すると考えられた。

第2節 誠和神社裏遺跡の立地

誠和神社裏遺跡は、条里遺構の広がる高瀬低位段丘1面から、30m高い陣ヶ原中段段丘面の東辺部に位置する。遺跡のすぐ東隣に誠和神社がある。遺跡の立地する陣ヶ原中段段丘面は東西約500m、

段丘端に立地



第1図 工事用道路と調査区的位置

南北約800mの広さの段丘面で、南から北に緩やかに下降する平坦な地形である。この段丘面上には、第5章で評述する陣ヶ原辻原遺跡をはじめ、台地の各所から遺物を採集することができ、各時代の遺跡が存在していたと推定される。

第3節 誠和神社裏遺跡の現状

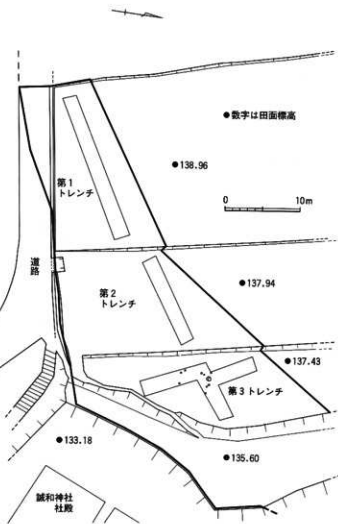
現状は水田 誠和神社裏遺跡の立地する陣ヶ原台地上は、誠和神社裏遺跡本調査区を含めて、現状は水田になっている。また段丘の斜面はほとんど杉林として利用されている。この現在の景観が成立したのは、それほど古いことではなく、1910～20年代の大正年間に耕地整理事業がおこなわれ、高瀬川の上流を水源とした水路の開削によって中位段丘面の水田化がおこなわれた後のことであった（註3）。それ以前は、本調査でも確認したことだが、畠地として利用されていた。調査区のすぐ東には誠和神社があり、高瀬集落（誠和町）側からこの台地にのぼる唯一の市道が南側を東西に走っている。

19世紀までは畑地

第4節 試掘調査の記録

試掘トレンチ 工用道路の路線内のうち、遺跡の存在の可能性がある台地部分の3枚の水田（田面標高138.96m・137.94m・137.43m）に試掘トレンチを、手掘りで行った（第1図）。上位の水田に第1トレンチ、中位の水田に第2トレンチ、下位の水田に第3トレンチを十字型にいった（第2図）。観察点は①土層の観察。水田化以前の土地利用を復元するための資料を得る。②遺構の有無を確認する。この2点に注目して試掘調査をおこなった。その結果、水田基盤層の下に遺構検出がすぐ現われる場所と、水田造成時の盛り土が広がる場所とがあることが判明した。この点を以下詳しくのべる。

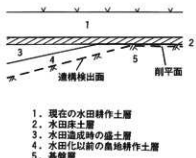
試掘の目的



第2図 誠和神社裏遺跡の試掘調査範囲

1) 層序の観察 (第3図)

第1・2層。現在の水田耕作土とその床土である。言うまでもなく各水田面に、同じ厚さで、かつ水平に堆積している。この層までを除去すると黄褐色粘質土でこの台地の基盤層にあたる第5層、暗茶褐色で軟質の土層からなる第4層、第5層と同じ黄褐色粘質土の大型ブロックが大量に入る暗褐色土層の第3層が、同一面に現われた。そして第3層の下に第4層、さらに下に第5層が傾斜して堆積していることが判明した。土層の内容からみて、第3層は4・5層を削平して盛り土した水田造成時の盛り土層であり、第4層は水田化以前の畝地の耕作土である。遺構の検出面は、削平部でも盛り土部でも第5層の上面である。遺構の保存状態は、当然のことながら3・4層が被っている5層上面の方がよく、5層上面が削平されている面の方がわるいと考えられる。



第3図 基本層序模式図

現水田層

水田造成による切盛

2) 出土遺物 (第4図・第1表・写真6・7)

各トレンチの1～4層内からは縄文時代から近世にかけての遺物が小片ながら出土した。1トレンチよりは2トレンチ、2トレンチよりは3トレンチの方が遺物の出土量は多かった。この出土量の差は、第3・4層の広がり1トレンチ、2トレンチ、3トレンチの順で多くなるということに由来すると推定される。1はチャート製の小型の石核である。縄文時代早期の可能性がある。2は、蛇紋岩製の磨製石斧の刃部片である。縄文時代の製品である。1・2はいずれも3トレンチ第1層出土。3・4は弥生時代中後期の甕型土器口縁部片である。3・4は3トレンチ第4層出土。5は弥生時代後期の甕型土器底部片で、3トレンチ第4層出土。6は弥生時代後期の壺型土器底部片で、3トレンチ第2層出土。7は奈良時代の土師器甕型土器口縁部片で、1トレンチ第3層出土。8は奈良時代の須恵器壺体部片で、1トレンチ第3層から出土。9は奈良時代の須恵器坏蓋口縁部片で、3トレンチ第4層出土。10は中世の土師質土器底部片で、3トレンチ第1層から出土。11は近世の土師質土器皿で、3トレンチ第2層出土である。糸切り離してはでない。このほかに図化できないほどの細片ながら、中国製青磁片、肥前産染付片、肥前産陶器片が、1・2点ずつ検出された。

縄文時代の遺物

弥生時代の遺物

奈良～近世の遺物

3) 検出遺構 (第2図)

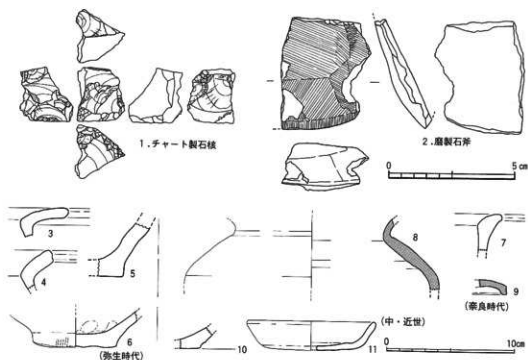
第1および第2トレンチでは柱穴等の遺構はまったく検出されなかったが、第3トレンチでは土壇と柱穴が検出され、掘立柱建物が存在すると推定された。

柱穴

4) 試掘調査の結果

第1トレンチでは水田床土の直下に第5層が全面に広がり、遺物も極めて少なかった。したがってすでに水田造成時に深く削平されたものと判断された。第2トレンチは、出土遺物こそ少なかったものの、3・4層の広がりがトレンチの東半で確認され遺構が保存されている可能性が考えられた。第3トレンチは、遺構が確認された上、遺物の出土量も多かった。

この試掘調査の成果から、第2・第3トレンチを設定した水田面の路線幅を本調査することになった(第1・2図)。



第4図 試掘調査出土遺物 (1・2=2/3, 3~11=1/3)

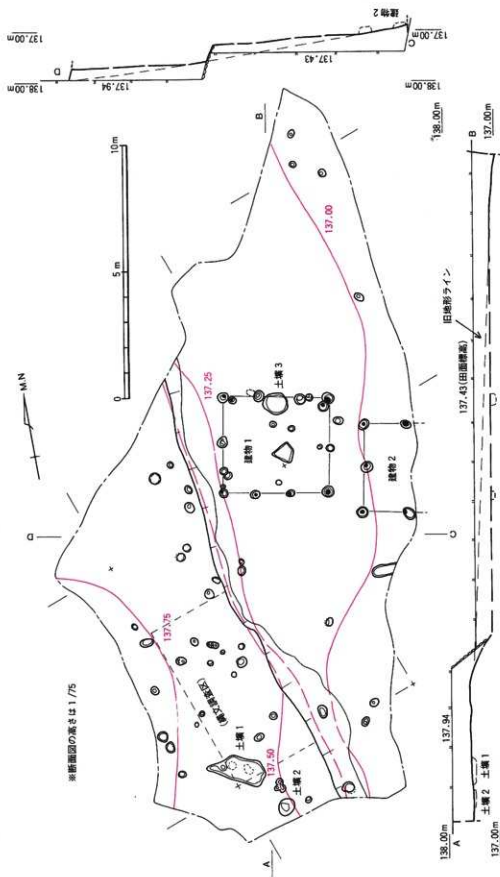
第1表 試掘調査区出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値
石器

挿図	写真図版	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
4図-1	6-1	石核	2.1	1.9	2.0	7.4	チャート	
2	2	磨製石斧	4.8	3.5	0.8	-	鮫紋岩	刃部破片

土器

挿図	写真図版	器種	法量 (cm)					調整	胎土	色調
			口縁口径	頸部径	胴部最大径	底径	器高			
4図-3	7-3	弥生土器 甕	-	-	-	-	-	内外面ナデ。	角閃石多い。長石、石英。	淡褐色
4	4	弥生土器 甕	-	-	-	-	-	内外面ナデ。	角閃石多い。長石。	淡褐色
5	5	弥生土器 甕	-	-	-	-	-	外面タテハケ(11本/1cm)。内面ナデ。	角閃石、石英、長石。	淡褐色
6	6	弥生土器 甕	-	-	-	6.4	-	外面タテハケ(6本/1cm)。内面ナデ。	角閃石多い。長石。	黒色
7	7	土師器 甕	-	-	-	-	-	外面ヨコナデ。内面ケズリ。	角閃石、長石、石英。	明褐色
8	8	須恵器 壺	-	12.0	20.0	-	-	内外回転利用のヨコナデ。	白色粒多い。	黒灰色
9	9	須恵器 坏蓋	-	-	-	-	-	上面ヘラケズリ。他はヨコナデ。	精良な粘土。	淡青灰色
10	-	土師質土器 坏	-	-	-	-	-	内外ナデ。底部回転糸切り。	角閃石。	明褐色
11	11	土師質土器 甕	10.2	-	-	6.9	2.2	口縁内外ヨコナデ。底部内外ヨコナデ。	砂粒少ない。	暗褐色

第5図 誠和神社遺跡発掘調査記録図 (1/150)



第5節 本調査の方法

遺構検出面 本調査は試掘調査に引き続き、試掘調査の結果から判断して本調査区を設定した。まず重機で1～4層を除去し、5層上面で遺構検出作業をおこない、検出された各遺構を掘り下げた。掘り下げの際には、土壌はいったん半載して断面土層を観察した上で全掘した。柱穴は柱痕跡と掘り方を区別した上で、柱痕跡から掘り下げた。さらに遺構検出中に5層上面で、5層にはいりこむかたちで押型文土器を発見したので、第5層調査区を設けて掘り下げた（第5図 縄文調査区）。調査区には10×8 m方眼に測量杭を打ち、20分の1で実測した。

第6節 遺構と遺物

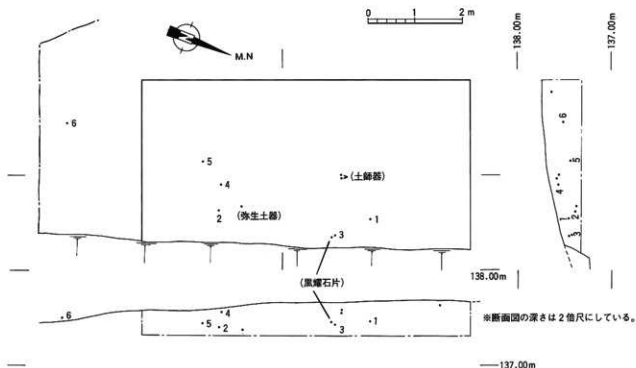
以下各遺構ごとに時代順に記述していく。

1. 縄文時代

押型文土器 本調査区の標高の高い場所で遺構検出中に、縄文時代早期の押型文土器を検出した。その地点を中心に測量用の方眼にあわせて、8×5 mの縄文時代調査区を設定し（第5図）、約30cm掘り下げたところで、遺物の出土がとまったので掘り下げを終了した（第6図・写真4）。遺構はまったく検出されず、通常なら検出されること多い集石遺構の残骸、つまり焼けた円礫などはまったく出土しなかった。

遺構はない

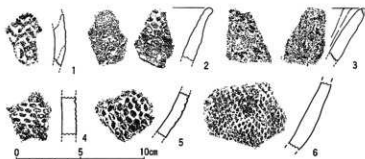
遺物は土器片7点、黒耀石片数点のみで、礫等はまったくなかった。石器のなかに製品は含まれていない。土器の小片が散在する状態で、取り立てて集中する地点はなかった。



第6図 縄文時代包含層の出土状況図 (1/60)

出土遺物（第7図・第2表・写真5）

土器はいずれも、押型文土器の深鉢の破片である。1は外面に比較的大型の山形文が横走する。押型文土器
2は口縁部片で、口縁部を薄くさせながらわずかに外反する。内外に楕円文を施す。3も口縁部片
で内面に原体条痕を施している。4・5・6はいずれも体部外面に楕円文を施している。このほかに
図示できない細片ながら、条痕調整の土器片と、腰岳産黒耀石の石片4点が出土している。



第7図 縄文時代包含層の出土遺物 (1/3)

第2表 縄文時代調査区出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

標 号	写真図版	器 種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	色 調	備 考
			口縁部径	底 径	器 高				
7図-1	5-1	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)山形文。 (内)ナデ。	角閃石多い。 石英。	橙褐色	縄文時代早期
2	2	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)楕円文。 (内)楕円文。	角閃石、石英 多い。	茶褐色	口縁部片。 縄文時代早期
3	3	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)不明。 (内)原体条痕。	角閃石多い。 石英。	暗褐色	口縁部片。 縄文時代早期
4	4	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)楕円文。 (内)不明。	角閃石。	黒褐色	縄文時代早期
5	5	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)楕円文。 (内)ナデ。	角閃石多い。	暗褐色	縄文時代早期
6	6	押型文土器 深鉢	-	-	-	(外)楕円文。 (内)ナデ。	角閃石多い。	暗赤褐色	縄文時代早期

2. 近世 (第5図・写真1~3)

掘立柱建物 2棟

土 壌

遺構の立地

第5図で示す遺構のほとんどは近世に属すると考えられる。遺構としては、おおよそ主軸を東西方向にとる掘立柱建物2棟が判明したが、礎石の使用を認められるものはなく、すべて掘立柱式の柱穴からなっている。そのほかに人為的な柱穴が30箇所ほど検出されたが、建物を構成することはなく、かつて建物が存在したとしても簡易な小屋掛け程度のものであったと推定される。土壌は3箇所検出され、円形のものとは不定形なものがあり、土壌3は建物1内の施設と考えられる。

近世の遺構群が設けられた場所は、第5図の断面図の破線で示した旧地形想定ラインからわかるように、緩やかな傾斜地にたてられている。特に掘立柱建物は傾斜のゆるい、段丘斜面に近い場所にたてられている。

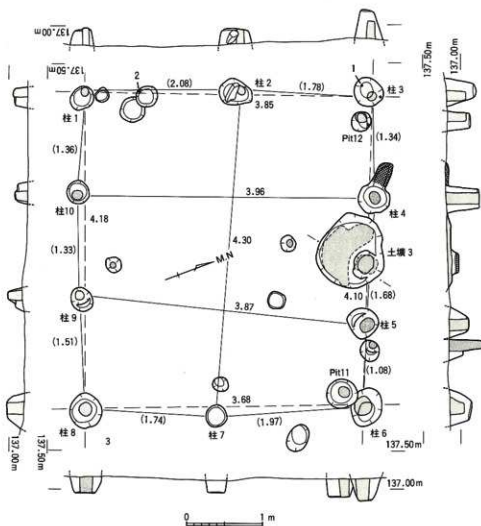
なお、以下の記述においては建物の長軸方向を「桁行」、短軸方向を「梁間」とする。また1間は1.82m、1尺は30.3cm、1坪は3.3m²で計算した。

掘立柱建物

1号掘立柱建物跡 (第8図・写真2・3)

2間3間

調査区のはほぼ中央に位置し、建物の長軸方向は北から約70度東向きである。梁間2間桁行3間で、10本の柱穴からなる。柱穴の中心距離で、西梁間は3.85m(約2間7寸)東梁間3.68m(約2間1寸)、北桁行4.10(約2間1尺5寸)m南桁行4.18m(約2間1尺8寸)の規模である。床面積は



第8図 1号掘立柱建物跡 (1/50)

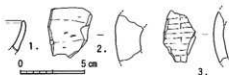
約15.6㎡ (4.7坪) で小型の獨立柱式平地建物といえる。四隅の柱の位置はやや歪んでおり、柱間も一定しない簡易な建てつけである。梁間の柱間寸法は平均約1.90m (約1間3寸) で尺間法の1間にほぼ相当するのに対し、桁行の柱間寸法は平均約1.38m (約4尺6寸) で、短くなっている。したがって2間3間の規格にしては、正方形に近い形になる。柱穴掘方はすべて平面円形で径30~40cmほどである。四隅の柱穴が大きな掘り方をもつ傾向がうかがわれるが、深さは変わらない。検出できた柱痕は円形で径は10~20cmである。全体に柱穴の深さは浅く、上部は水田化時に削平されていると推定される。

床面積
15.6㎡

出土遺物は柱穴埋土内から20点ほど土器が出土した。

出土遺物

大半は混入した弥生土器・土師器片であった。第9図にはその内実測可能な3点を図示した(第3表・写真8)。1は柱穴3から出土した土師質土器坏口縁片で、中世あるいは近世の遺物。2・3は大きさの異なるフイゴの羽口片である。2は柱穴8の埋土中、3は建物内的小ピットから出土。この他に柱穴5から近世の白色陶器の小片が出土している。



第9図 1号獨立柱建物跡出土遺物(1/3)

ところで北桁行の柱4と柱5の間が広くとられており、その間に壁面に添う位置に3号土壌が検出されているので、この土壌は本来建物に伴う施設であるとみられる。そこで3号土壌を先に触れる。

3号土壌を
付設

3号土壌(第10・11図・写真2)は90×95cmの平面が不整形円形をし、深さ15cmで2段に掘られている。この土壌は上部を削平されており、本来はさらに20~30cmほど深かったと推定される(第5図断面参照)。底面は水平に掘られている。1層は上段に堆積した灰白色粘土層である。2層はこの土壌の機能停止後に堆積した暗褐色軟質土層で、炭や焼土の小片が入る。3層は2層よりしまった暗褐色土層で、大型の炭片、焼土のブロックが大量に混じっていた。しかし土壌の側面や底面そのものには、火を受けた痕跡はなかった。遺物はわずかに1点のみで、1は奈良時代ごろの須恵器坏身口縁部片である(第11図・第4表・写真8)。

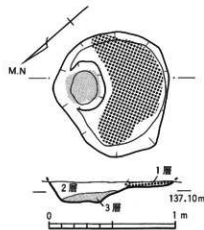
粘土と焼土

この建物の機能は居住用ではなく、付設土壌の存在、土壌内炭・焼土混じり層の存在、フイゴの羽口の出土等からみて、火力を使う工房である可能性を指摘しておきたい。具体的にどんな工房であったかは不明だが、短期的な工房だとすれば建物自体の簡易性も理解しやすい。

工房跡?

建物の時期は、当初土壌3出土の須恵器に引きずられて奈良時代だとする誤りを犯したが、近世陶器の小片の存在と建物構造などから近世江戸時代とするべきであろう。

近世の建物



第10図 3号土壌実測図(1/30)



第11図
3号土壌
出土遺物(1/3)

第3表 1号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

挿図	写真図版	器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	色調	備考
			口縁部径	底径	器高				
9図-1	写真8	土師質土器 坏?	-	-	-	(内外)ヨコナデ	精良な粘土。	淡褐色	中近世
2	8	フイゴ 羽口	-	-	-	(内)ナデ、 (外)ヘラケズリ	砂粒少ない。	(外)淡褐色、 (内)黒灰色	
3	8	フイゴ 羽口	-	-	-	(内)ナデ、 (外)ヘラケズリ	砂粒少ない。	(外)淡褐色、 (内)黒灰色	

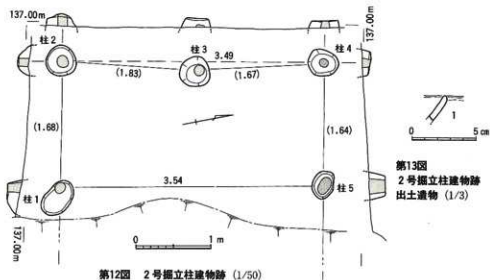
第4表 3号土竪出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

挿図	写真図版	器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	色調	備考
			口縁部径	底径	器高				
11図-1	写真8	須恵器 坏身	-	-	-	(内外)ヨコナデ	石英。	灰白色	奈良時代

2号掘立柱建物跡 (第12図・写真2・3)

調査区の東端に位置し、建物の東半分はすでに削平されていた。柱穴2・3・4の面を梁間とすると、建物の長軸方向は北から約75度東向きである。1号建物とはほぼ同じ方向に、開口を少しずらして建てられたと推定される。梁間2間桁行2間以上で、5本の柱穴を検出した。柱穴の中心距離で、西梁間は3.49m (約1間5尺5寸)、北桁行1.64m以上南桁行1.68m以上の規模である。柱間の距離は1号建物より揃っている。床面積は6㎡以上で小型の掘立柱式平地建物といえる。建物の東半分は削平されているが、梁間の寸法、柱穴の大きさなどからみて、床面積20㎡前後の梁間2間桁行3間程度の小型の建物に復元するのが妥当であろう。柱穴掘方はすべて平面円形で径30~40cmほどである。四隅の柱穴が大きな掘り方をもつ傾向がうかがわれるが、深さは変わらない。検出できた柱痕は円形で径は10~15cmである。全体に柱穴の深さは浅く、上部は水田化時に削平されていると推定される。

2間2間以上



第13図
2号掘立柱建物跡
出土遺物 (1/3)

第5表 2号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

挿図	写真図版	器種	法量 (cm)			調整・文様	胎土	色調	備考
			口縁部径	底径	器高				
13図-1	-	土師質土器 坏?	-	-	-	(内外)ヨコナデ	長石多い。	(外)淡褐色、 (内)黒灰色	中近世

出土遺物

出土遺物は2点のみで、いずれも土器である。1点は混入した弥生土片である。1は柱穴2から出土した土師質土器坏口縁片で、中世あるいは近世の遺物 (第13図・第5表)。1号建物出土の

土師質土器片（第9図-1）と同一個体である可能性が高い。

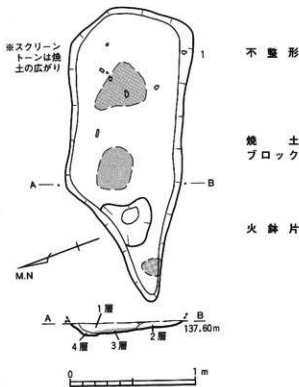
梁間の長さ比べると2号建物の方が1号建物より狭いのだが、桁行の柱間距離は2号の方が長く柱間距離も揃っているので、建築物としては2号建物の方が堅固な作りになると推定される。居住用の建物を想定するのであれば、こちらの方がふさわしい。

1号建物と同じ方向に並んで建てられている点や、同一時期の土師質土器片が出土している点などからみて、近世に建てられたと考えられる。

土壌

1号土壌（第14図）

調査区の南端に位置し、約230×95cmの規模の平面不整形の土壌である。深さ5～10cmである。この土壌は上部を削平されており、本来はさらに深かったと推定される（第5図断面参照）。底面は整っていない。土壌そのものは焼けていないが、埋土中には焼土ブロックが多くはいつており、炭も入っている。1層は赤橙色土層で、焼土がブロック状に堆積して、よくしまっていた。2層は赤茶褐色土層で、焼土が少し混じる。3・4層は淡茶灰色土層である。遺物は10点ほどいづれも細片である。1は奈良時代ごろの土師器甕口縁片で混入遺物である（第15図・第6表）。ほかの土器片は弥生土器、土師器片で、1点のみ近世の瓦質土器火鉢の底の破片が出土しており、この土壌の年代の上限を示していると考えられる。



居住用建物

近世の建物

不整形

焼土
ブロック

火鉢片



第15図 1号土壌出土遺物 (1/3)

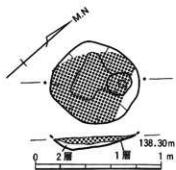
第14図 1号土壌平面図・土層図 (1/30)

第6表 1号土壌出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

採 号	写真図版	器 種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	色 調	備 考
			口縁部径	底 径	器 高				
15図-1	-	土師器 甕	-	-	-	(内外)ヨコナテ	砂粒多い。	淡橙色	

2号土壌（第16図）

1号土壌のそばにある。約70×65cm規模の平面が円形の土壌である。深さ10cm前後で底面は整っていない。この土壌は上部を削平されており、本来はさらに深かったと推定される（第5図断面参照）。1層は上層に堆積した淡黒褐色土層である。炭が混じる。2層は黄褐色軟質土層で、炭のブロックが多く混じる。しかし土壌の側面や底面そのものには、火を受けた痕跡はなかった。遺物は混入した押型文土器1点のみでほかにはなかった。時期を示す遺物はなかったが、炭混じり層が堆積している点と1号土壌のそばにある点からみて、一連の近世遺構と関係があるものと推定される。



第16図 2号土壌実測図 (1/30)

円 形

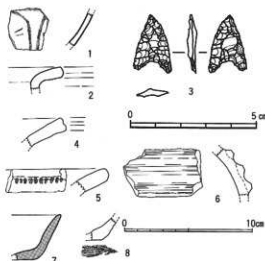
近世遺構?

柱穴および上層出土遺物 (第17・18図・第7表・写真8)

柱 穴 調査区内からは掘立柱建物を構成できない柱穴を30箇所ほど検出した。遺物はほとんど出土せず、時期も不明である。そこから出土した遺物と、本調査中に1～4層から出土した遺物を紹介する。1はピット1の埋土中で出土した中国製竜泉窟産青磁碗片である。2はピット1のそばの4層中で出土した弥生土器甕口縁部で、2次的な加熱を受けている。以下は上層出土遺物である。3は姫島産黒耀石製の打製石鎌である。4は弥生土器の甕片である。5は弥生土器の甕口縁部片で、端部に刻み目が施文されている。6は弥生時代中期の壺型土器体部片である。3条の台形突帯を張り付け、外面に丹塗りを施す。7は奈良時代の須恵器坏身である。8は中世の土師質土器坏片で、回転糸切り離しである。



第17図 柱穴群配置図 (1/400)



第18図 柱穴および上層出土遺物
(3=1/2, ほかは1/3)

第7表 柱穴および上層出土遺物観察表 (外)=外面、(内)=内面 ()内の数値は復元推定値

挿 図	写真図版	器 種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石 材	備 考
18図-3	写真8	打製石鎌	2.3	1.5	0.35	0.9	姫島産黒耀石	定形品

土器

挿 図	写真図版	器 種	法 量 (cm)			調整・文様	胎 土	色 調	備 考
			口縁部径	底 径	器 高				
18図-1	写真8	中国産青磁 碗	-	-	-	(外) 龍弁文。 (内) 貫入		(内) 灰白色。 (外) 淡緑色	中世
2	8	弥生土器 甕	-	-	-	(内) ココナテ。 (外) ココナテ。	石炭多い。角 閃石、金雲母。	(外) 淡緑色。 (内) 赤褐色。	口縁部片
4	8	弥生土器 甕	-	-	-	(内) ココナテ。	角閃石、石英。	淡～暗褐色	口縁部片
5	8	弥生土器 甕	-	-	-	(内) ココナテ。 刻み目。	角閃石、石英 多い。	淡褐色	口縁部片
6	8	弥生土器 壺	-	-	-	(内) ココナテ。 刻み目。	角閃石、石英 多い。	淡褐色	
7	8	須恵器 坏身	-	-	-	(内) ココナテ。 (底) ヘラナズリ	石炭多い。	灰白色。	奈良時代
8	8	土師質土器 坏?	-	-	-	(内) ナテ。 (底) 回転糸切り	砂粒少ない。	(内) 淡褐色。 (外) 淡褐色	

第7節 調査の成果と課題

1) 陣ヶ原台地の集落立地

遺構としては近世の掘立柱建物や土壌しか検出できなかったにもかかわらず、1～4層中から様々な時代の遺物が出土し、陣ヶ原台地の誠和神社裏遺跡周辺でどのような土地利用がおこなわれていたかをある程度推測できると思われる。

まず縄文時代の早期の小規模な遺跡の存在をあげなければならない。この遺跡の性格は①少量の土器の存在、②石器のなかに製品・礫器がなく、石片のみが少量存在する。③集石遺構等の遺構が存在しない。④近隣に湧水等の長期間使用するのに適した自然条件がない。などの点から短期間少人数の縄文人が使用した遺跡であると推察される。

次に遺物のなかで目に付くのは弥生土器で、中期から後期前半の壺・甕が多い。今回の調査区内からは遺構は見つからなかったものの、誠和神社裏遺跡周辺の台地上にその時期の集落遺構が存在していることは疑いない。土器型式をみる限り少なくとも中期から後期前半にかけて集落は継続していたと推測される。

その次に多い遺物は奈良時代前後の須恵器である。第5章でのべる陣ヶ原比原遺跡の奈良時代集落の存在からみても、誠和神社裏遺跡付近に奈良時代の遺構が存在する可能性は高いと考える。

そして近世には掘立柱式平地建物2棟からなる「小屋敷地」が1単位存在するが、短期間に廃絶したと考えられる。

この4時期以外の時代の遺物はきわめて少なく、集落遺跡等の数多くの遺構からなる遺跡が、誠和神社裏遺跡の周辺に存在した可能性は少ない。

したがって、高瀬低位段丘1面を見下ろす陣ヶ原中段位段丘の縁辺部では、弥生時代中期から後期にかけて、集落が継続した可能性が高く、縄文時代早期、奈良時代、近世には短期間ながら小集落が立地していたと推定される。

2) 近世の遺構

近世の遺構と考えられるものは、先に触れたように掘立柱式平地建物2棟と土壌3基である。建物遺構はこの2棟のみで、調査区内で見ると北・南・西の方向には建物は存在しない。東側は大きく削平されているが、すぐに段丘崖になるため2号建物より東に建物が建つ可能性はない。したがって、建物2棟のみで完結すると考えてよい。1号建物と2号建物は同一方向に建てられ、桁行を南面させている点からみても、ほぼ同時に建てられたと推定される。さらに建物群と離れた位置に存在する1・2号土壌についても、埋土中の炭層と焼土ブロックの存在から1号建物の機能と有機的な関係を持つ施設と考えられる。そうすると近世の遺構群全体は2棟1単位および土壌から構成される「小屋敷地」と考えられる。屋敷地を区画するような施設は、当然あったと思われるが、遺構として痕跡を残していない。また建物や土壌に切り合い関係や直直しの跡がなく、同時に屋敷地が設定され建物が配置された後、建て替えられることなく短期間のうちに廃絶したものと推定される。

ではその屋敷地はどのように利用されているのであろうか(第5図参照)。まず注目されるのは、2棟の建物は桁行を南面させている点である。1号建物内部の北側中央に3号土壌が位置する点から、反対側の南側に入口が存在する可能性がもっとも高い。建物が南面し入り口が南側にあるとすれば、1・2号建物と1・2号土壌の間の空間が問題となる。この空間は遺構としてなら痕跡を残していないが、屋敷地内の「庭」空間として様々な利用されたことは想像にかたくない。そしてこの庭を介した反対側の端に土壌が掘られたと見られる。2棟の建物は機能の違いをもつ可能性

台地の
土地利用

縄文早期

弥生時代

奈良時代

近世

集落立地
の変遷

2棟で完結

小屋敷地

短期廃絶

屋敷地の
空間構成

があることは先にふれた。すなわち1号建物は火力を使用する工房、2号建物は居住用と推定できる。

屋敷地の構成は、このように推定されるが、次に建物の規模と存続時期を検討しておきたい。

小規模な
建 物

大分県内においても最近近世遺跡の調査が盛んであるが、城下町や近世墓地の調査が多く、農村の集落遺構調査例は少ない。その中で日田盆地の隣玖珠盆地において近世建物群の調査報告が2遺跡でなされている。小竿遺跡(註4)と西田遺跡(註5)である。小竿遺跡は17世紀末から18世紀の8棟の掘立柱建物が検出されている。簡単に床面積で比較すると、小竿遺跡では8棟の掘立柱建物は、10㎡以上20㎡未満2棟、20㎡以上30㎡未満2棟、30㎡以上40㎡未満2棟、40㎡以上50㎡未満2棟という内訳になる。西田遺跡では18世紀台の掘立柱建物3棟のうち、20㎡以上30㎡未満1棟、50㎡以上60㎡未満2棟となる。この2遺跡の建物と比較すると誠和神社裏遺跡1号建物は15.6㎡、2号建物は20㎡未満であるので、誠和神社裏遺跡の2棟の建物はもっとも小規模な建物ということになる。

遺構の時期

屋敷地の時期であるが、これまでの記述のなかでは近世としか表現してこなかったのは、それ以上の時期を限定する資料と出土状態に恵まれなかったためである。少くとも明治20年前後(1880年代後半)に作製された地籍図を見る限り、誠和神社裏遺跡の場所は畠地になっており、その時点では宅地でないのは明らかである(註6)。今のところ18世紀後半から農村部において普及する近世陶磁器がきわめて少ないという消極的理由から、17-18世紀代の屋敷であると考えている。

17-18世紀

〈註および参考文献〉

- 註1 田中裕介「誠和神社裏遺跡 陣ヶ原辻原遺跡 上野第1遺跡(東原地区) 一般国道201号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ」1991 大分県教育委員会
- 註2 友岡信彦編「一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報」1990 大分県教育委員会
- 註3 末広利人「近代一大正時代」『日田市史』1990 日田市
- 註4 小柳和宏編「小竿遺跡-大分県玖珠郡玖珠町大字山田所在遺跡の調査」1985 玖珠町教育委員会
- 註5 栗田勝弘ほか「西田遺跡」『小田遺跡群Ⅰ-大分県玖珠郡玖珠町所在集落遺跡の発掘調査報告書Ⅰ』1987 玖珠町教育委員会
- 註6 日田法務局で閲覧



写真1 誠和神社裏遺跡全景
(北から)



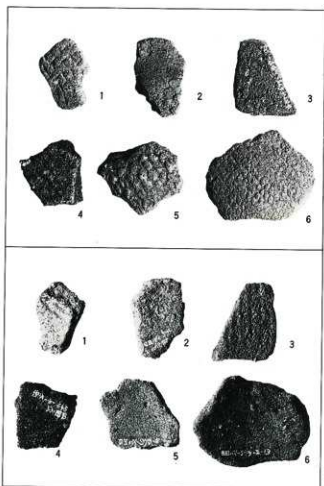
写真2 1号掘立柱建物跡
(北から)



写真3 掘立柱建物1号、2号
(西から)



写真4 縄文時代早期調査区



(外)

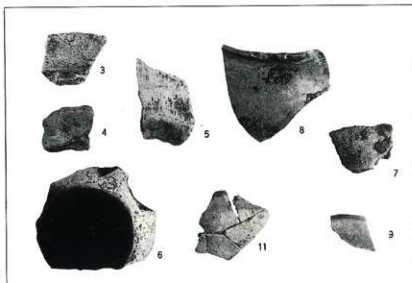
写真5 縄文時代早期調査区と
出土遺物(押型文土器)
(第7図と番号対応)

(内)

写真6 試掘調査区
出土石器
(第4図と番号対応)



写真7 試掘調査区
出土石器
(第4図と番号対応)



11図-1 3号土壌
9図-1、2、3 1号獨立柱建物跡
18図1~8 柱穴および土層出土遺物

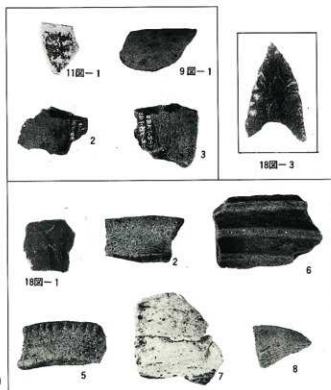


写真8 遺構出土遺物
(図番号と対応)



写真9 小原地区の試掘



写真10 1990年度の調査風景

第4章

後藤家墓地

要 項

1. 現地調査 1990(平成2)年5月10日
調査担当者 坂本嘉弘・田中裕介・新宅信久
現地で実測と拓本をおこなった。
2. 整理作業 1994(平成6)年度
図面浄書は西村しのぶ・田中があたった。
3. 報告書作成 1994(平成6)年度
本章の編集執筆は田中があたった。
作成中、原田昭一(県文化課)氏に助言をえた。
4. 例言
遺構図の方位は磁北(M.N.)で表示した。真北からの偏差は西6度40分(1960年)。

第4章 後藤家墓地

第1節 後藤家墓地の調査経過と概要

後藤家墓地は日田市大字高瀬字辻原に所在する。石製墓碑4基を墓上施設とする小さな墓地である。墓地が使用された期間は19世紀である。地形的には、陣ヶ原の中位段丘から高瀬の低位段丘1面に下る斜面の、比較的高い位置（標高130mあたり）に、墓地は存在している。現在の地目は山林である。

この墓地は、日田バイパス建設用の工事用道路内の分布調査の際に注意されたものである。管理者の宿利氏によれば、工事にともなって移転するとのことであり、注目すべき型式の墓碑が存在することから、平板測量と石製墓碑の実測調査をおこなった。その結果、位牌型墓碑3基、尖頭角柱型墓碑1基からなる墓地であることが判明し、2基は江戸時代の1828（文政11）年と1852（嘉永5）年、もう2基は明治時代の1883（明治16）年と1884（明治17）年の没年銘を刻んだ墓碑であった。

調査の範囲は、墓地が直接の工事範囲外ということもあり、地上施設に留めた。調査方法は、まず10分の1平面図を作成して墓碑の位置と墓碑の正面方向を記入したのち、各墓碑の写真撮影と10分の1実測図を作製した。その際成名などの刻字面は拓本を採った。

墓地の位置

4基の墓碑

調査の範囲と方法

第2節 後藤家墓地の立地

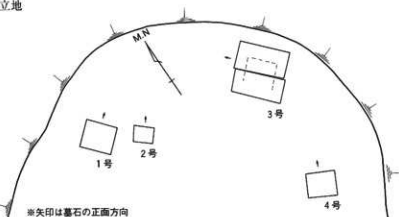
墓地は段丘斜面の高い位置に集落を見下ろすように立地し、東西4m南北2mほどの狭小な平地に斜面を削りだして墓域を造成している（第1図、写真1）。なぜこのような段丘の斜面に墓地を作っているのであろうか。この

墓地の始まりが、最古の墓碑である1号墓の死者が埋葬された1828年として、墓地周辺の土地利用がその当時どうなっていたかを復元できれば考えやすいであろう（第2図）。

第5章で報告する陣ヶ原辻原遺跡の近世遺構から推定できる点は、墓地の背後の陣ヶ原中位段丘面が、すでに19世紀には、全体が畠地区画溝によって分割されているので、墓地を新たに作るための場所が台地上に

墓地の立地

斜面に立地する墓地



第1図 後藤家墓地墓碑配置図 (1/40)



写真1 後藤家墓地遺景

近世の開発と墓地の立地

は求められなかったという点を指摘できる。また斜面下の高瀬低位段丘1面には水田と宅地が展開しており、屋敷地の中に墓地を作る習慣のない当日田地方では、土地利用度の低い段丘斜面が選ばれたものと推定される。



第2図 後藤家墓地立地模式図

第3節 後藤家墓地の現状と構成

墓碑の配置 近世墓地は本来、その墓地の範囲を示す施設と埋葬施設（地下遺構と遺骸）、墓碑、墓地に至る道などの遺構から構成されるはずである。しかし墓地の周辺はすでに土採り工事で削りとられているので、墓地周辺の遺構は観察できなかった。そこで墓地復元の資料となる墓碑の配置と墓碑の現状を記述しておく（第1図）。

2号墓碑は移動 墓碑のうち1・3・4号墓は台石が深く地面に食い込んでおり、石材表面の風化の状態から見ても、建立当初の位置を保っていると考えられる。これに対し2号墓は墓石本体のみが台石を離れ1号墓のそばに立っており、台石も付近には見当らなかった。台石は地中に埋没してしまっているか、すでに削られた場所に立っていたかのいずれかであろう。後述する墓石本体の年代・型式などから見て本来4号墓に近接して立てられていた可能性が高い。

墓地の平面構成 下位斜面の方向（第1図の上側）を墓地の正面とすると、1・2・4号墓碑は正面奥と同じ方向（東北方向）ではば1列に並んでいる。3号墓のみは手前にとびだして、他の墓碑から直角に振った方向（西北方向）を向けて立っている。1号と3号の正面に空間があり、そこが墓参りのための祭祀空間と考えられるので、墓に至る道は、屋敷地の背後から、その祭祀空間に取りつく形で設定されていたものであろうと推定される（第2図）。

いずれの墓碑も埋葬施設の腐朽に伴う陥没をこうむっていないので、埋葬直後の墓碑建立は考えがたく、7回忌あるいは13回忌などの10年ほどたった忌日に、石製墓碑を建立したものと推定される。

第4節 石製墓碑の記録

石製墓碑の番号は配列順に西から1～4号とつけたが、以下の記述は比較の便宜を考慮して、被葬者の没年順に記述する。墓碑の詳細な観察計測は一覧表（第2表）をみていただきたい。

1号墓碑 —1828（文政11）年没成人墓—（第3図、写真2）

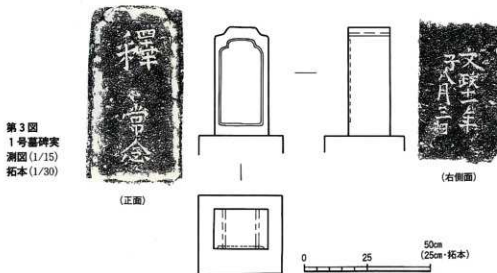
この墓碑は墓地のもっとも西寄りに、東北方向に正面を向けて立っていた。本体（いわゆる穂）1石・台石1段からなり、本体を固定するための納（ほぞ）はない。石材は本体・台石ともに凝灰岩を使っている。

本体は高さ43cm（1尺4寸余り）、幅21cm（約7寸）、厚さ17cm（5寸余り）で、上下に寸法の差はない。墓碑の形式は位牌型の範疇に入りが（註1）、頭部の曲面が半円形ではなく左右が凹み、笠塔婆型の影響を受けた型式である。正面の花燈形は一段ばかりで、左右下の隅は丸く



1号墓碑
凝灰岩製
位牌型

写真2 1号墓碑



第3図
1号墓碑実
測図(1/15)
拓本(1/30)

(正面)

(右側面)

彫っている。正面には「釋 常念」の戒名が一行に、右側面には「文政十一年 子八月三日」の死亡年紀が2行にかけて、葉研彫で彫られていた。他の場所には刻字はない。刻字可能な面は、正面・左右両側面の三面で、多観面（三観面）の墓碑である（註2）。

文政11年銘

台石は一段のみで、高さ8cm以上、幅33.5cm（約1尺1寸）、奥行31.5cm（1尺余り）の方形の一枚石である。

以上の点から、この墓碑は1828年（文政11年8月3日）に没した成人を埋葬したもので、戒名からみて死者の宗旨は浄土真宗であると考えられる。石製墓碑そのものは、木棺の腐朽による陥没をこうむっていないので、3回忌までの早い時期に建てたものではないと思われる。そして墓碑本体の型式は2号以下と異なっているので、3号墓碑が建てられた1860年頃、あるいは2・4号墓碑が建てられた1890年代などの後の時期に子孫が追贈したものととは考えにくい。したがって1号墓碑は7回忌あるいは13回忌などの忌日に建てられたもので、おおよそ埋葬から10年後の1830年代後半に建てられたと推定しておきたい。

遺立年代

3号墓碑 —1852年(嘉永5年)没成人合葬墓碑— (第4図、写真3)

3号墓碑 この墓碑は墓域の中央東北寄りであり、他の3基がいずれも東北方向に正面を向けながら西北から南東方向にほぼ一列に並ぶのに対し、3号墓碑のみはその並びからはずれしかも正面方向が西北を向いている。本体1石・台石2段からなり、本体を固定するための納はない。石材は本体・台石2枚ともに凝灰岩を使っている。

凝灰岩製

本体は高さ35cm(1尺1寸余り)、幅24cm(約8寸)、厚さ24cm(約8寸)で、上下に寸法の差はなく、断面正方形の柱状石材を加工している。頭部は一底辺24cm高さ5cmの正四角錐形に作っている。したがって墓碑の形式は尖頭角柱型の範疇に入る(註3)。

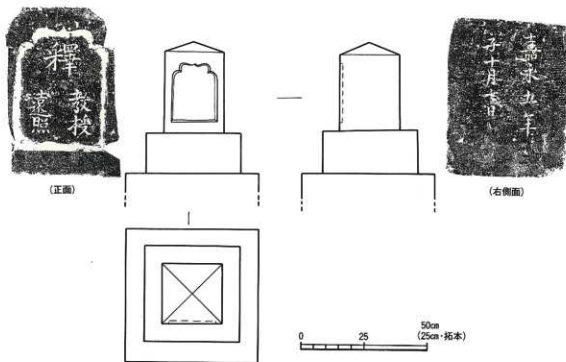
尖頭角柱型

正面の花燈形は一段ほりで、上部に錐状の突出をもつ。左右下の隅は角をなす。正面には「釋 教授 遠照」の戒名が上1行下2行に、右側面には「嘉永五年 子十月十日」の死亡年紀が2行に分けて、それぞれ裏研影で彫られていた。「教授」が男性、「遠照」が女性と推定される。他の場所には刻字はない。

戒名と年紀



写真3 3号墓碑



第4図 3号墓碑実測図(1/15)、拓本(1/30)

合葬墓碑 刻字可能な面は、正面・左右側面・背面の4面で、多観面(四観面)の墓碑である。戒名が2名分彫られていることから、墓碑において合葬を表現したものと考えられる。死亡年紀がどちらの被葬者の銘文か不明であるが、1852年には二人とも亡くなっていると考えられる。

台石は2段である。上石は高さ17.5cm(5寸余り)、幅38cm(1尺2寸余り)、奥行38cm(1尺2寸余り)の正方形の一枚石である。下石は2枚を並べたもので、あわせて高さ10cm以上、幅53cm(1尺7寸余り)、奥行53cm(1尺7寸余り)に整えている。

**1852年
夫婦合葬**

以上の点から、この墓碑は1852年(嘉永5年10月10日)に没した成人を埋葬したのち、以前に葬られていた1名と一緒に、2名の死者(生前は夫婦であった可能性がもっとも高い)を合同して祭

る合葬墓碑として立てられたものと考えられる。戒名からみて宗旨は浄土真宗である。石製墓碑そのものは、木棺の腐朽による陥没をこうむっていないところから、3回忌までの早い時期に建てたものではない。そして墓碑本体の型式は1・2・4号と異なっているので、2・4号墓碑が建てられた1890年代に子孫が追贈したものとは考えにくい。したがって3号墓碑は7回忌あるいは13回忌などの忌日に建てられたもので、おおよそ埋葬から10年後の1860年代前半に建てられたと推定しておきたい。

遺立年代

4号墓碑 —1883(明治16)年没後藤やす基—(第5図、写真4)

この墓碑は墓地のもっとも東寄りに、おおよそ東北方向に正面を向けて立っていた。本体1石・台石1段からなり、本体を固定するための納はない。石材は本体・台石ともに凝灰岩を使っている。

4号墓碑
凝灰岩製
位碑型

本体は高さ48cm(約1尺6寸)、幅21.5cm(約7寸)、厚さ17cm(5寸余り)で、上下に寸法の差はない。墓碑の形式は位牌型の範疇に入る。正面の花燈形は一段ほりで、左右下の隅は角に造る。

正面には「一如法性院妙真日如」の戒名が一行に、左側面には「明治十六年 旧十一月五日 后藤やす基」の死亡年記と俗名が上2行下1行にわけて、薬研形で彫られていた。他の場所には刻字はない。刻字可能な面は、正面・左右両側面の三面で、多観面(三観面)の墓碑である。



戒名と年記

多観面

台石

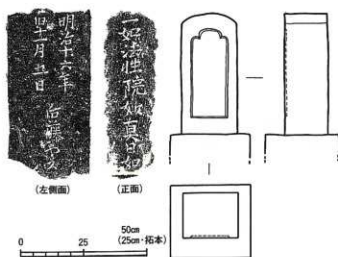
2号墓碑と
同時建立

台石は一段のみで、高さ8cm以上、幅33cm(約1尺1寸)、奥行29cm(9寸余り)の方形の一枚石である。

以上の点から、この墓碑は1883年(明治16年旧11月5日)に没した成人女性後藤やす基さんを埋葬したものである。石製墓碑そのものは、木棺の腐朽による陥没をこうむっていないので、3回忌までの早い時期に建てたものではない。そして、2号墓碑とは墓碑の型式が同じというだけでなく、寸法まで酷似しており、2号墓と同時に建てられたと考えられる。したがって3号墓碑は7回忌あるいは13回忌などの忌日に建てられたもので、おおよそ埋葬から10年後の1890年代前半に2号墓碑といっしょに建てられたと推定しておきたい。

写真4 4号墓碑

1890年代
建立



第5図 4号墓碑実測図(1/15)、拓本(1/30)

2号墓碑 —1884年(明治17) 没後藤作助墓— (第6図、写真5)

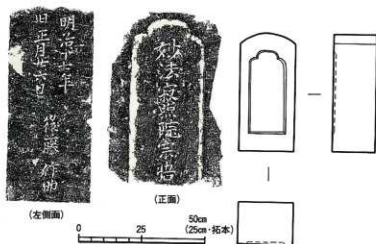
2号墓碑 墓碑本体は墓域西側の、1号墓碑のすぐ東隣に立っており、現状では東北方向に正面を向けている。

台石なし 本来あるべき台石がないので、墓碑本体は移動していると推定される。墓碑本体に納突起はない。
凝灰岩製 石材は凝灰岩である。本体は高さ47cm(1尺5寸余り)、幅22cm(7寸余り)、厚さ17cm(5寸余り)で、上下に寸法の差はない。墓碑の形式は頭部の形態からみて、位牌型の範疇に入る。正面の花燈形は一段はりで、左右下の隅は角をなす。正面には「妙法寂照院宗悟」の戒名が1行に、左側面には「明治十七年 旧正月廿六日 後藤作助」の死亡年紀と俗名が、上2行下1行にかけて、薬研形で彫られていた。他の場所には刻字はない。刻字可能な面は、正面・左右両側面の三面で、多観面である。

多観面 以上の点から、この墓碑は1884年(明治17年旧暦8月3日)に没した成人男性後藤作助さんを埋葬した墓にたてられたものであり、本来の埋葬位置から移動した可能性が高い。4号墓との墓碑形式と規格の一致から、1890年代に4号墓碑と同時に建てられたと考えられる。



写真5 2号墓碑



第6図 2号墓碑実測図(1/15)、拓本(1/30)

第5節 調査の成果と課題

本節では、まず調査によって記録された後藤家墓地の墓碑形式を説明し、造墓過程の復元案を示した上で、後藤家墓地の調査から派生する課題を述べておきたい。

1) 後藤家墓地の墓碑形式 (第7図)

後藤家墓地はわずかに4基の石製墓碑からなる小規模な墓地にすぎないが、墓碑の形式は変化に富み、日田地方の近世墓地を考える上で今後の出発点となる墓地である。

墓碑の形態は、墓碑本体の正面頭部の形状から、2形式に大別できる。すなわち頭部が低い半円形をえがく位牌型(1・2・4号)と、低い二等辺三角形を描き立体観が正四角錐となる尖頭角柱型(3号)である。さらに位牌型は、頭部の曲面の左右が凹み笠塔婆型(註1)の影響を受けたと推定される位牌型A(1号)と、一般的な形態の位牌型B(2・4号)に細別される。

位牌型Aは、大分市内や国東地方では知られていない型式であるが、関東地方では18-19世紀に多くみられる型式に似ている。江戸および江戸周辺の近世石製墓碑の分類をおこなった谷川幸雄の分類(註4)によるE-6類にもっとも近い。位牌型Bは、大分県内においても1740年代からもっとも普及する型式で、19世紀後半に方柱型(註5)に数において取って代られるものの、今世紀まで造立される墓碑形式である。2・4号墓碑の製作年代(1890年代)も上記の年代観と矛盾はない。尖頭角柱型はいまのところ豊後高田市田染の大門旧墓地で2・3例報告されているのみであるが、当日田地方では、近世墓地において比較的多く見かけられる墓碑形式である。

墓碑本体の正面に戒名等を印すために彫りくぼめられている花燈の形態は、2種類に分類できる。3号墓碑のように通常の花燈形の上端中央に三角の突出をつける花燈形A式と、1・2・4号墓のような花弁型の形をなす通常の花燈形B式である。A式は18世紀を中心に、B式は19世紀を中心に流行するもので、1852年銘の3号墓碑にB式がもちいられているのは珍しい例である。



第7図 後藤家墓地の墓碑形式

2) 後藤家墓地の復元と造墓過程 (第8図、第1表)

墓地の始まりと遷地 4基の墓碑のうち、最古の死亡年記を記録している墓碑を、墓地の最初の被葬者とする。1828(文政11)年の死亡年記をもつ1号墓碑の被葬者が最初にこの墓地に葬られた、と考えてよい。したがってこの墓地がこの場所に設定された時期は、1号の被葬者を埋葬する際か、それに先立って墓地に利用する予定地として確保された際のどちらかであるが、いずれにしても1820年代(文政年間)に後藤家墓地が始まったと考えられる。

後藤家墓地の始まりにあたって、この場所が遷地された理由は、まず集落の背後地が選ばれていること、しかし陣ヶ原の中位段丘面上は1820年代以前に畠地化しており、畠地のなかに墓地を作るのがばかられたために、土地利用度の低い段丘斜面が選ばれたと考えられる。

そして、墓地が新たに造られる前提として、後藤家はその時期に、新たにひとつの「家」として独立したという事実があることはいうまでもあるまい。その際、家の宗旨は浄土真宗になっている。

造墓過程とその内容 まず4墓碑の5名の被葬者の関係を推定しておきたい。4・2号墓は俗名がいずれも、後藤姓で、戒名には2名とも院号がついており、戒名全体の形式も同じである。さら

墓碑の型式

位牌型 A

位牌型 B

尖頭角柱型

花燈形

1828年初葬

浄土真宗

4号・2号
は夫婦

3号夫婦
合葬

同一血縁
3世代墓

に4・2号の墓碑本体は、型式が同じ(位牌型B)というだけでなく、寸法が高さ・幅・厚さとも極めて似ており、同時に石工に注文されたといえるものである。共通の子孫によって墓碑が建てられたこの男女は、生前は夫婦であったと考えがちがいあるまい。そして2・4号墓以前の3号墓は、男女2名の合葬墓碑で、墓碑と戒名型式を同じくすることからみて、やはり夫婦と考えられる。1号と3号との間は24年、3号と4・2号の間には31・2年の間隔があり、1世代の間隔とみるのが最もふさわしい。そして宗旨も一貫しているところから、同一血縁の3世代の墓とみられる。つまり「釋常念」の時独立した家を相続した3世代の墓地といえるのではなかろうか。

以上のように復元した被葬者の関係をもとに造墓の過程をたどってみよう。1828(文政11)年に「釋常念」という戒名がつけられた成人が葬られてから、10年ほど経過した1830年代に1号墓碑が建てられる。「釋常念」を葬って1号墓碑を建てたのは、のちに3号墓に葬られた「釋教授 釋遠照」の夫婦であったと考えられる。この夫婦が1852(嘉永5)年までに亡くなり、埋葬ののち1860年代に、彼らの合葬墓碑(3号)を建てたのは、のちに4・2号墓に葬られた後藤作助・やすの夫婦であったと考えられる。そして、作助・やすの夫婦が1883(明治16)年・1884(明治17)年に続けて亡くなり埋葬される。その後1890年代(明治20年代)の忌日に、彼らの子孫によって2名の墓碑が同時に建てられた。以上のように考えられる。

空間配置

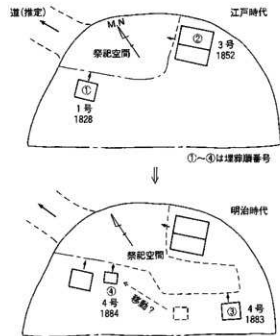
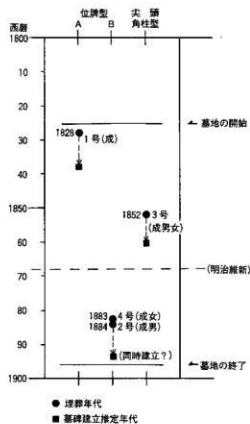
空間的な墓碑の配置からみると、1号墓が墓地の入り口近くに建てられ、次に3号墓が90度向きをかえて入り口を向いて建てられる。その後1・3号墓の奥に4・2号墓が建てられていく(第8図)。

墓地の終わり この後藤家墓地は現在にいたるまで所有者によって管理されており、無縁墓になっているわけではない。ここで問題にする墓地の終わりとは、新たな埋葬と墓碑の建立が無くなることであり、それがいつで、なぜ埋葬されなくなったのかを問題とする。

最終埋葬の
年代

まず最終埋葬に注目すると、2号墓に後藤作助さんが葬られたのが1884(明治17)年である。しかし墓碑は1890年代に建てられており、その時点までは墓地は使われている。したがって4・2号墓を作った後藤作助・やす夫妻の子供夫婦がなぜ

第1表 後藤家墓地造墓年代表



第8図 後藤家墓地の造墓過程

この墓地に葬られなかったかが問題となる。

いま二案が考えられる。1案は後藤家の事情によるもので、後藤作助・やす夫妻の後子孫は日田を離れ、別の土地で墓地を作った可能性、直系の子孫が絶えた可能性などである。

もう1案は明治時代の墓地条令による墓地の移転の可能性である。明治17年(1884)に明治政府は、太政官布達第25号として「墓地及埋葬取締規則」を、内務省達乙第40号として「墓地及埋葬取締規則法細目標準」をだしている。特に後者の第二条には「墓域ヲ新設スルハ園道泉道鉄道大川ニ沿ハヌ人家ヲ隔ルコト凡ソ六拾間以上ニシテ 土地高燥飲用水ニ障ナキ地ヲ選ムベシ」と、墓地の新設に制限を加える法令がだされている。この条文が各県で施行される過程で拡大解釈され、新設の墓地だけではなく旧来の墓地への新たな埋葬の際にも適用されていたこと。そして各県での施行時期は明治の後半期から大正時代にも及ぶことが明らかにされている(註6)。大分県条令としてだされたのは1902(明治35)年であったといわれる(註7)。大分県での施行はかなり厳重であったようで、この法令を境として旧来の墓地を移転して新墓を作る例が多く知られている。

この墓地条令の内容と施行時期に注目すれば、後藤家墓地は人家から60間という規定に該当し、1902(明治35)年以後の埋葬がないという点でも矛盾はなく、この墓地条令によって後藤家墓地は埋葬できなくなり、墓地は終焉したと解釈できるのである。

この2案いずれであるかは、今回の調査の範囲では明らかにできなかった。ここであえて墓地条令について紹介したのは、近世墓地の終焉を考える上で、墓地条令との関係を検討することが、必要不可欠であると思うからである。

3) 今後の課題

後藤家墓地の調査に判明した資料のうち、今後の近世墓地の調査研究の際に注意していただきたい点を2点のべる。

位牌型Aに注意せよ。 1)で触れた墓碑形式のうち、今回報告した1号墓の位牌型Aは大分県内ではほとんどみられない。あるいは位牌型のなかに大きく分類されてあまり注目されない型式である。しかしその形態は笠塔婆型の墓碑の笠部と墓碑本体が一体化した型式であり、墓碑の形態変化と系譜を考えるうえで重要な型式であると予想される。今後の型式の系譜・製作使用年代・分布・石工等に注意していただきたい。

尖頭角柱型の分布は天領と関係があるか。 3号墓の尖頭角柱型墓碑は、管見のかがり大分県内においては、国東半島、大分市域でわずかにみられるが、非常に数の少ない型式である(註8)。ところが日田市域においては報告例こそ少ないが、位牌型に次いで数多く見いだすことができる。したがって大分県内の近世墓碑の分布において、この墓碑形式は地域的に偏在する型式ではないかと予測される。ところでこの墓碑形式が目玉されるのは、江戸の近世墓碑との比較においてである。というのは、ここで言う尖頭角柱型は、江戸とその周辺の近世墓碑をみつかった谷川分類のE-1類(註9)にあたり、江戸自証院墓地の分類ではB-1-d類(註10)とされ18世紀初頭から位牌型墓碑に次いで盛行した型式であることが明らかにされているからである。つまり尖頭角柱型は、近世の江戸周辺では近世墓碑のなかで一定の割合をもって普遍的に建立された墓碑であるとされる。この墓碑が大分県では日田地方にかなり多くみられる事実は、日田が17世紀中頃に以来近世を通じてずっと幕府領(いわゆる天領)であったという事実を介在させるとき、尖頭角柱型墓碑は江戸の近世墓碑の直接的影響のもとに日田地方に分布するようになったのではないかという推測を導くものである。さらに最近報告された福岡県北九州市京町遺跡の浄土真宗本願寺派永照寺墓地の墓石調査によれば(註11)、尖頭角柱型(E-1類)が位牌型(D類)に次ぐ数発見されている。京町遺跡は江戸時代の小倉城下にあり、譜代大名小笠原氏の城下町であった。尖頭角柱型と譜代大名という

明治の
墓地条令

位牌型A
の問題

尖頭角柱型
の分布

天領と
墓碑型式

取り合せも、江戸幕府との関係が濃密な地域に、この型式が普及するのではないかという予測を補うものである。今後尖頭角柱型墓碑が県内各地の近世墓碑のなかでどの程度、そしてどこに分布するかという点に注意していただきたい。

〈註および参考文献〉

- 註1 田中祐介「大分県の近世墓碑」『大分県地方史』137 1990 大分県地方史研究会
- 註2 坂訪秀一「石製塔婆と墓碑」『中山法華経寺誌』1981 日蓮宗大本山法華経寺
三好義三「近世墓碑の形態と民衆の精神の変化について」1986 『大学院年報』3 立正大学大学院
文学研究科
- 註3 山田拓伸「近世の墓地和墓碑」『豊後国田楽花の調査』I 1986 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 註4 谷川章雄「近世墓碑の形態分類と編年について—千葉県市原市高滝・費老地区の調査—」『文学研究科
紀要』別冊10哲学史学編 1984 早稲田大学文学研究科
- 註5 註1文献では冒頭としたものである。
- 註6 新谷尚紀「西墓制の分布についての覚書」『国立歴史民俗博物館研究報告』49 1993 国立歴史民俗博
物館
- 註7 金田信子「国東半島の石工」1 1981 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館
- 註8 註1文献参照
- 註9 註4文献
- 註10 野沢均・小川秀樹「墓碑調査—中野区上高田四丁目自証院墓地の調査—」『自証院遺跡』東京都新宿区
教育委員会 1987
- 註11 柴尾俊介「京町遺跡5」(北九州市撰文報告149) 1994 (財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財
調査室

第2表 後藤家墓地石製墓碑一覽表

番号	被 葬 者				本体型式	花燈形	正面碑文	右側面碑文	左側面碑文
	年齢	性別	西曆没年	宗 旨					
1号	成人	不明	1828 (文政11)	浄土真宗	位碑型A	B式	釋 常念	文政十一年 丁八月三日	—
3号	成人 2名	男性と 女性か	1852 (嘉永5)	浄土真宗	尖 頭 角 柱 型	A式	釋 教授 達照	嘉永五年 子十月十日	—
4号	成人	女性	1883 (明治16)	?	位碑型B	B式	一如法性院如真日如	—	明治十六年 旧十一月五日 后藤ヤス
2号	成人	男性	1894 (明治17)	?	位碑型B	B式	妙法寂願院宗悟	—	明治十七年 旧正月廿六日 後藤作助

番号	刻字配列	本体寸法計測値 (単位cm) 1尺=30.3cm							本体石材
		正面高	背面高	側面高	上部幅	下底幅	上部厚	下部厚	
1号	多観面 (三観面)	43 1尺4寸余	43 1尺4寸余	39 約1尺2寸余	21 約7寸	21 約7寸	17 5寸余	17 5寸余	凝灰岩
3号	多観面 (四観面)	(中央高) 35 1尺1寸余		29 9寸余	24 約8寸	24 約8寸	24 約8寸	24 約8寸	凝灰岩
4号	多観面 (三観面)	48 約1尺6寸	48 約1尺6寸	44 1尺4寸余	21.5 約7寸	21.5 約7寸	17 5寸余	17 5寸余	凝灰岩
2号	多観面 (三観面)	47 1尺5寸余	47 1寸5寸余	43 1尺4寸余	22 7寸余	22 7寸余	17 5寸余	17 5寸余	凝灰岩

番号	台石	台石寸法(1段目) 単位cm				台石寸法(1段目) 単位cm				納 結合	墓碑 正面 方向
		高 さ	幅	奥 行	石材	高 さ	幅	奥 行	石材		
1号	1段	8以上	33.5 約1尺1寸	31.5 1尺余	凝灰岩	—	—	—	—	なし	東北
3号	2段	17.5 5寸余	38 1尺2寸余	38 1尺2寸余	凝灰岩	10以上	53 1尺7寸余	53 1尺7寸余	凝灰岩	なし	西北
4号	1段	8以上	33 約1尺1寸	29 9寸余	凝灰岩	—	—	—	—	なし	東北
2号	消失	—	—	—	—	—	—	—	—	なし	東北